

館報<sup>1983</sup> 32

# ANNUAL REPORT

BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

ブリヂストン美術館  
久留米・石橋美術館



ブリヂストン美術館  
BRIDGESTONE MUSEUM OF ART

久留米・石橋美術館  
ISHIBASHI MUSEUM OF ART

館報 1983 32  
昭和58年度

目次

1	設立趣旨, 機構・運営 .....	2
2	主な記録 .....	4
	ブリヂストン美術館	
	• 特別展 .....	4
	• 地方展 .....	13
	• その他の記録 .....	13
	• 土曜講座 .....	14
	石橋美術館	
	• 特別展 .....	16
	• 特別展示 .....	25
	• 地方展 .....	26
	• 美術館講座 .....	30
3	1983年度入場者数 .....	31
4	新収蔵作品 .....	32
5	修復記録——黒江光彦 .....	36
6	研究報告——中田裕子 .....	38
7	美術館案内 .....	48

---

## 設立趣旨

### ブリヂストン美術館

ブリヂストン美術館は、石橋正二郎氏が多年にわたって蒐集愛蔵した内外の美術品を、社会公共のため、広く一般の鑑賞に供し、文化向上の一端に貢献したいとの趣旨に基づき、昭和27年1月8日、ブリヂストンビルディング建設の機会に同ビル内に開設されたものである。その後昭和31年4月に設立された財団法人石橋財団がその経営を継承し、昭和36年9月には同財団が石橋氏から所蔵美術品の寄贈を受けた。なお、昭和34年5月には面積が二倍に拡張されると共に、設備に大改良を加えた新装工事が完成した。

### 石橋美術館

石橋美術館は、石橋正二郎氏が昭和31年4月26日、ブリヂストンタイヤ株式会社（現株式会社ブリヂストン）の創立25周年を記念して、社会公共の福祉と文化向上のために、郷土久留米市に寄贈した石橋文化センターの中心施設である。昭和52年、創設者・石橋正二郎氏の遺族の寄付により増改築が行われ、同年4月以降、久留米市の委託により、石橋財団がその経営に当たっている。

## 機構・運営

(昭和59年3月31日現在)

### 石橋財団

**理事長** 石橋幹一郎

**理事** 鳩山威一郎、茅 誠司、柴田周吉、盛田昭夫、有田一寿、氷室憲吉、嘉門安雄

**監事** 加嶋昭男、亀徳正之、赤司二郎

**評議員** 石橋幹一郎、茅 誠司、柴田周吉、竜頭文吉郎、鶴沢 晋、石井公一郎、木村 登、小林行雄、郷 裕弘、河北倫明、谷 信一、山田智三郎、朝吹三吉、石橋 寛、真藤 恒、高崎芳郎、吉久勝美、氷室憲吉、嘉門安雄、谷口鉄雄

**事務局長** 氷室憲吉

**総務部長** 門司一二三

### 美術館運営委員会

**委員長** 石橋幹一郎

**委員** 河北倫明、谷 信一、山田智三郎、朝吹三吉、脇田 和、高階秀爾、友部 直、石橋 寛、嘉門安雄、谷口鉄雄

### ブリヂストン美術館

**参与** 久保貞次郎、松本栄一

**館長** 嘉門安雄

**事務部長** 大崎新一 **学芸課長** 阿部信雄

### 石橋美術館

**館長** 谷口鉄雄

**学芸課長** 山上隆之輔 **事務課長** 渡辺啓一郎

---

## BRIEF HISTORY

### BRIDGESTONE MUSEUM OF ART

On January 8, 1952, in celebration of the completion of the Bridgestone Building, Mr. Shôjirô Ishibashi (1889—1976), ever mindful of the promotion of cultural development in Japan, opened to the public an art gallery within the building, under the name of "Bridgestone Gallery." Mr. Ishibashi's personal collection formed the nucleus of the exhibits of paintings, sculptures and other art objects. In April 1956 the management of the Gallery was taken over by the Ishibashi Foundation, and in September 1961 Mr. Ishibashi donated numerous art objects of his collection to the Foundation. In May 1959 the Gallery was considerably enlarged and entirely renovated, and in January 1968 the English name was changed from "Bridgestone Gallery" to "Bridgestone Museum of Art."

### ISHIBASHI MUSEUM OF ART

On April 26, 1956, in celebration of the 25th anniversary of the founding of the Bridgestone Tire Co., Ltd. (present name : Bridgestone Corporation), Mr. Shôjirô Ishibashi donated the Ishibashi Cultural Center to the city of Kurume, his native place, for the purpose of rendering services to the public and promoting cultural development. The Museum (originally called "Ishibashi Art Gallery") is the main institution of the Center. In 1971 the English name was changed from "Ishibashi Art Gallery" to "Ishibashi Museum of Art." In 1977, thanks to a contribution of the bereaved family of Mr. Shôjirô Ishibashi, the building of the Museum was reconstructed and extended, and in April of the same year the Ishibashi Foundation was entrusted with the management of the Museum by the city of Kurume.

## ORGANIZATION & MANAGEMENT

(As of March 31, 1984)

---

### Ishibashi Foundation

<b>President of the Board of Directors</b>	Kanichirô Ishibashi			
<b>Directors</b>	Iichirô Hatoyama	Seiji Kaya	Shûkichi Shibata	Akio Morita
	Kazuhisa Arita	Kenkichi Himuro	Yasuo Kamon	
<b>Auditors</b>	Akio Kashima	Masayuki Kitoku	Jirô Akashi	
<b>Conucillors</b>	Kanichirô Ishibashi	Seiji Kaya	Shûkichi Shibata	Bunkichirô Ryûtô
	Susumu Uzawa	Kôichirô Ishii	Noboru Kimura	Yukio Kobayashi
	Yasuhiro Gô	Michiaki Kawakita	Nobukazu Tani	Chisaburô Yamada
	Sankichi Asabuki	Hiroshi Ishibashi	Hisashi Shintô	Yoshirô Takasaki
	Katsumi Yoshihisa	Kenkichi Himuro	Yasuo Kamon	Tetsuo Taniguchi

**Managing Director** Kenkichi Himuro      **General Affairs Manager** Hifumi Monji

### Executive Committee of the Museums

<b>Chairman</b>	Kanichirô Ishibashi			
<b>Members</b>	Michiaki Kawakita	Nobukazu Tani	Chisaburô Yamada	Sankichi Asabuki
	Kazu Wakita	Shûji Takashina	Naoshi Tomobe	Hiroshi Ishibashi
	Yasuo Kamon	Tetsuo Taniguchi		

---

### Bridgestone Museum of Art

<b>Councillors</b>	Sadajirô Kubo	Eiichi Matsumoto		
<b>Director</b>	Yasuo Kamon			
<b>Administrator</b>	Shinichi Ôsaki	<b>Chief Curator</b>	Nobuo Abe	

---

### Ishibashi Museum of Art

<b>Director</b>	Tetsuo Taniguchi			
<b>Chief Curator</b>	Ryûnosuke Yamagami	<b>Administrator</b>	Keichirô Watanabe	

---

---

## 主な記録 ブリヂストン美術館

### 《特別展》

---

#### 青木 繁=明治浪漫主義とイギリス

1983年4月29日(金)―5月29日(日)(月曜休館/27日間)

主催：石橋財団ブリヂストン美術館/東京新聞

後援：外務省/文化庁/ブリティッシュ・カウンシル

協力：英国航空

出品内容：青木 繁：油彩28点、水彩12点、素描10点；イギリス絵画：油彩14点、水彩6点、その他11点；参考出品5点  
計86点

入場者数総数：41,606人

---

#### 青木 繁(1882―1911)

1. 自画像 油彩、画布/81×60.5cm/1903年(石橋美術館蔵)
2. 輪転 油彩、画布/27.3×37.6cm/1903年(石橋美術館蔵)
3. 享楽 油彩、板/33.3×23.3cm/1903年(大原美術館蔵)
4. 享楽 油彩、板/33.3×23.3cm/1904年(大原美術館蔵)
5. 天平時代 油彩、画布/46×76.5cm/1904年(ブリヂストン美術館蔵)
6. 海の幸 油彩、画布/69×181.5cm/1904年(石橋美術館蔵)
7. 海 油彩、板/10.3×15cm/1904年(石橋美術館蔵)
8. 海景(布良の海) 油彩、画布/35×71.5cm/1904年(石橋美術館蔵)
9. 女の顔 油彩、板(羽子板)/33×9.5cm/1904年(石橋美術館蔵)
10. 農家 油彩、板/23.6×33cm/1904年(石橋美術館蔵)
11. 木立(森の暮色) 油彩、板/33×24cm/1904年(石橋美術館蔵)
12. 男の顔(自画像) 油彩、画布/81×61cm/1904年(大原美術館蔵)
13. 自画像 油彩、ボール紙/33.6×24.6cm/1905年(三重県立美術館蔵)
14. 大穴牟知命 油彩、画布/75×127cm/1905年(石橋美術館蔵)
15. 女星 油彩、羽子板/137×37cm/1906年(宗教法人パーフェクト・リパティ教団蔵)
16. 旧約聖書物語挿絵
  1. 光あれ 油彩、板/23.5×33cm/1906年
  2. 紅海のモーゼ 油彩、板/33×23.5cm/1906年
  3. ヤエル、シセラを斬る 油彩、板/33×23.4cm/1906年
  4. ソロモン王とエルサレム 油彩、板/23.4×33cm/1906年
  5. ネブカデネザルとダニエル 油彩、板/33×22.9cm/1906年
  8. エステルとハマシ 油彩、板/23.5×33cm/1906年
17. 光明皇后 油彩、画布/38×72.5cm/1906年(石橋美術館蔵)
18. 日本武尊 油彩、画布/70×37cm/1906年(東京国立博物館蔵)
19. 雪景 油彩、板/23.3×32.8cm/1906年(石橋美術館蔵)
20. 幸彦像 油彩、画布/29.8×22.8cm/1907年(栃木県立美術館蔵)
21. わだつみのいろいろの宮下絵 油彩、板/33×23.5cm/1907年
22. わだつみのいろいろの宮下絵 油彩、画布/70.5×31.8cm/1907年(栃木県立美術館蔵)
23. わだつみのいろいろの宮 油彩、画布/181.5×70cm/1907年(石橋美術館蔵)
24. 月下滞船図 油彩、画布/41.5×57cm/1908年(石橋美術館蔵)
25. 天草風景 油彩、画布/45.5×60cm/1909年(大原美術館蔵)
26. 温泉 油彩、画布/70.8×36cm/1910年
27. 佐賀風景 油彩、板/22.5×30cm/1910年(佐賀県立博物館蔵)
28. 犬 油彩、画布/32×44cm/1910年
29. 黄泉比良坂下絵 水彩、紙/22.8×30cm/1903年(福岡市美術館蔵)
30. 黄泉比良坂 水彩、紙/48×33.3cm/1903年(東京芸術大学蔵)
31. 闍威弥尼 水彩、板/15×10.2cm/1903年(石橋美術館蔵)

32. 春 水彩, 紙/16.3×32.3cm/1904年(石橋美術館蔵)
33. 豎琴をもてる女 水彩, 紙/直径11cm/1904年
34. 水浴 水彩, 紙/14×25cm/1904年(石橋美術館蔵)
35. 丘に立つ三人 水彩, 紙/16×14cm/1904年(石橋美術館蔵)
36. 絵かるた
  1. 絵かるた(小野小町) 水彩, 紙/8.7×6cm/1904年
  2. 絵かるた(在原業平) 水彩, 紙/8.7×6cm/1904年
  3. 絵かるた(紫式部) 水彩, 紙/8.7×6cm/1904年
  4. 絵かるた(文字のない) 水彩, 紙/8.7×6cm/1904年
  5. 絵かるた(文字のない) 水彩, 紙/8.7×6cm/1904年
  6. 絵かるた 水彩, 紙/8.7×11.2cm/1904年
37. 風景 水彩, 絹(扇面)/15×40.5cm/1904年(石橋美術館蔵)
38. 鑪斧(『春鳥集』口絵) 水彩, 紙/14×9.1cm/1905年
39. 春 水彩, 襖布/直径44.5cm/1908年(石橋美術館蔵)
40. 秋 水彩, 襖布/直径44.5cm/1908年(石橋美術館蔵)
41. 汗の妙義山スケッチ行 鉛筆・淡彩, 紙/13×18cm(×2枚)/1902年
42. 麓より妙義山を望む 鉛筆, 紙/12.3×17.7cm(×2枚)/1902年
43. 神塞妙義 鉛筆・淡彩, 紙/14×21.7cm(×2枚)/1902年
44. 落葉径 鉛筆・淡彩, 紙/18×13cm(×2枚)/1902年
45. 秋の夜 鉛筆, 紙/14.5×16cm/1902年(石橋美術館蔵)
46. 妙義登山戯画 鉛筆・淡彩, 紙/15×23cm/1902年
47. 妙義山金洞第一石門 鉛筆・淡彩, 紙/17.7×13.2cm(×2枚)/1902年
48. 黄泉比良坂下絵 赤コンテ, 紙/33×32.5cm/1903年(福岡市美術館蔵)
49. 自画像 色鉛筆, 紙/16.5×11cm/1903年(石橋美術館蔵)
50. 真・善・美 鉛筆, 紙/13.6×4cm(×3枚)/1905-06年頃(神奈川県立近代美術館蔵)

**ジョージ・フレデリック・ワッツ(1817—1904)**

51. オルフェウスとエウリュディケ 油彩, 画布/69.9×45.7cm/1869年(アパディーン美術館蔵)
52. カインの罪の告発 油彩, 画布/147×66cm/1871-72年(ワッツ・ギャラリー寄託)
53. ナクソス島のアリアドネ 油彩, 画布/75×96cm/1875年(ギルドホール・アート・ギャラリー蔵)
54. 希望 パステル, 紙/136×107cm(ワッツ・ギャラリー寄託)

**ダンテ・ゲイブリエル・ロッセティ(1828—1882)**

55. ボルジア家の人々 水彩, 紙/36.2×37.8cm/1863年(ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館蔵)
56. ベアトリーチェの挨拶 水彩・ボディカラー, 紙/37×41cm/1863年
57. 20歳のエレン・テリー パステル, 板/158×41cm/1868年

**ジョン・ロッド・スベンサー・スタンホープ(1829—1908)**

58. 息子達の死を悼むリズパの習作 油彩, 画布/33.8×21cm/1860年代初(ロンドン, ファイン・アート・ソサエティー蔵)

**サー・エドワード・バーン＝ジョーンズ(1833—1898)**

59. マーリンとニムエ グワッシュ, 紙/64×50.8cm/1861年(ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館蔵)
60. 愛の歌 グワッシュ, 紙/55.7×78.2cm/1865年(ボストン美術館蔵)
61. ヴィナスの鏡の習作 油彩, 画布/81.2×127cm/1868年頃(フォーブス・マガジン・コレクション)
62. 少女の頭部の習作 チョーク, テラコッタ紙/34.3×27.9cm/1889年(ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館蔵)
63. 三女神 パステル, 紙/135.9×69.8cm/1895年頃(カーライル美術館蔵)
64. 若い女 チョーク, 紙/40×33cm/1896年(東京, ギャラリー・アート・アンド・クラフト蔵)
65. 《キューメアのシビュレ》によるエッチング 43.5×17.5cm/1882年
66. 「いばら姫連作」より《いばらの森》(1890年)によるフォトグラヴェール 41.9×82.8cm/1892年(東京, ガレリア・グラフィカ蔵)

67. 「いばら姫連作」より《いばらの城の中庭》(1890年)によるフォトグラヴェール 42.4×78.4cm/1892年(東京、ガレリア・グラフィカ蔵)
68. 《粉ひき場》(1870年)によるエッチング 23.7×51.5cm/1899年
69. 《春》によるエッチング 43.8×30cm/1900年
70. 「ザ・フラワー・ブック」より《ヴィナスの鏡》(1885年頃)による石版画 直径16.5cm/1905年  
サー・ローレンス・アルマ・タデマ(1836—1912)
71. ピュリケーの踊り 油彩、板/41.5×82.5cm/1869年(ギルドホール・アート・ギャラリー蔵)
72. 嘆願 油彩、画布・板/22.5×36.5cm/1876年(ギルドホール・アート・ギャラリー蔵)
73. 賛美 油彩、板/40.5×33cm(楕円)/1907年(三越蔵)  
アルバート・ムーア(1841—1893)
74. ざくろ 油彩、画布/28×37cm/1866年頃(ギルドホール・アート・ギャラリー蔵)
75. ギリシアの劇 黒チョーク・水彩、紙/12.7×53cm/1868年頃(ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館蔵)
76. アネモネ 油彩、画布/44.4×15.2cm/1880年(フィッシャー・ファイン・アート蔵)
77. 赤い実 油彩、画布/48×117cm/1884年頃(プレ・ラフィライト・トラスト蔵)  
ウォルター・クレイン(1845—1915)
78. ローエングリン 色チョーク・ボディーカラー、紙/90×56cm/1895年(フォープス・マガジン・コレクション)  
ジョン・メリッシュ・ストラドウィック(1849—1935)
79. 無言歌 油彩、画布/72×97cm/1874年頃(クリストファー・レノックス=ポイド氏蔵)  
ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス(1849—1917)
80. 人魚 油彩、画布/98×67cm/1900年(英国王立美術院蔵)  
チャールズ・ヘイズルウッド・シャノン(1863—1937)
81. 真珠採り 油彩、画布/95×69.5cm/1894—99年(ロンドン、ファイン・アート・ソサエティー蔵)

#### 参考出品(1)

藤島武二(1867—1943)

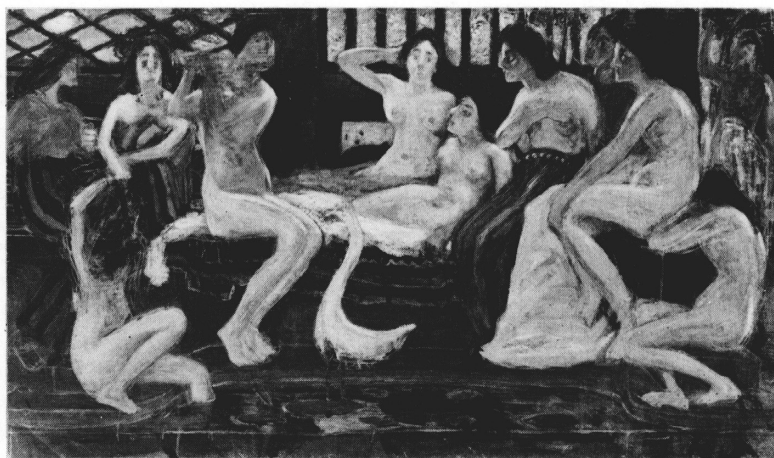
1. 天平の面影 油彩、画布/198.5×94cm/1902年(石橋美術館蔵)
2. 画稿集 油彩・水彩・墨等、和紙/28.2×20.1×6.7cm(ブリヂストン美術館蔵)
3. 縮図帖 木版、紙/36.7×33.7×1.5cm(ブリヂストン美術館蔵)

#### 参考出品(2)

1. 雑誌『明星』複製版
2. イギリス美術書3冊(国立国会図書館蔵)



展覧会ポスター



5





26



40



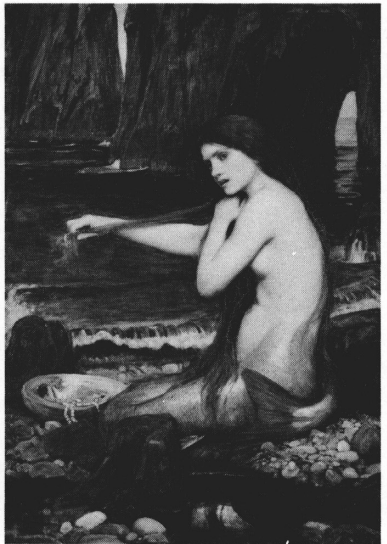
70



30



51



80



75

---

## 日本近代洋画の巨匠とフランス

1983年9月15日(木)―10月23日(日)(月曜休館/34日間)

主催：石橋財団ブリヂストン美術館/東京新聞/全国美術館会議

後援：外務省/フランス大使館

協力：日本航空

出品内容：日本絵画：油彩64点、素描25点；フランス絵画：油彩35点、その他4点 計128点

入場者総数：31,235人

---

### ラファエル・コラン(1850―1916)

1. 眠り<sup>フオレアル</sup> 油彩、画布/119×209cm/1873年(ルーアン美術館蔵)
2. 花月 油彩、画布/110.5×191cm/1886年(アラス美術館蔵)
3. 天井画下絵 油彩、画布/89×33cm/1881年頃(鹿児島市立美術館蔵)
4. 令妹の像 油彩、画布/53×41cm/1890年頃(鹿児島市立美術館蔵)
5. 麦わら帽子を持つ婦人、下絵 油彩、画布/80.2×39cm/1894年頃(鹿児島市立美術館蔵)
6. 麦わら帽子を持つ婦人 油彩、画布/194×112cm/1894年(福岡市美術館蔵)
7. 私生活(室内の裸婦) 油彩、画布/54×51cm/1897年(ロダン美術館蔵)
8. 若い娘(O嬢)の肖像 油彩、画布/81.5×65.2cm/1900年(アラス美術館蔵)
9. 静寂(あるいは、樹下の裸婦) 油彩、画布/129×88cm/1903年
10. 異教的情景(あるいは、無心) 油彩、画布/97×200cm/1904年(大嶽電気美術館蔵)
11. 想い 油彩、画布/59×81.2cm/1904年
12. 横臥婦人図 油彩、画布/88×168.4cm(東京国立文化財研究所蔵)
13. ブロンドー夫人の肖像、下絵 油彩、画布/65.3×33.4cm(久米美術館蔵)
14. 荒地 油彩、画布/45.6×55.6cm(久米美術館蔵)
15. 無名の墓 油彩、画布/35.3×27.4cm
16. コンポジション 油彩、画布/27.4×35.3cm
17. コンポジション 木炭、紙/48.5×31.3cm(鹿児島市立美術館蔵)
18. 半裸の婦人 木炭、紙/53×33.2cm(鹿児島市立美術館蔵)
19. 歌う女 木炭、紙/58×36cm(鹿児島市立美術館蔵)

### 黒田清輝(1866―1924)

20. 裸体・男(半身) 油彩、画布/61×44cm/1889年(東京国立文化財研究所蔵)
21. 裸体・女(全身) 油彩、画布/81.6×44.7cm/1889年(東京国立文化財研究所蔵)
22. 画室にての久米桂一郎 油彩、画布/39.5×47.7cm(久米美術館蔵)
23. 祈禱 油彩、画布/75.3×54.8cm/1889年(東京国立文化財研究所蔵)
24. 針仕事 油彩、画布/80×65cm/1890年(石橋美術館蔵)
25. アトリエ 油彩、画布/72.8×60.6cm/1890年(鹿児島市立美術館蔵)
26. グレーの水車場 油彩、板/23.9×32.7cm/1890年頃(久米美術館蔵)
27. プレハの少女 油彩、画布/81×54cm/1891年(ブリヂストン美術館蔵)
28. 婦人図(厨房) 油彩、画布/179.8×114.5cm/1891-92年(東京芸術大学蔵)
29. 白き着物を着せる西洋婦人 油彩、画布(板で裏打ち)/79.5×43.6cm/1892年(ひろしま美術館蔵)
30. 昔語り下絵(男と舞妓) 油彩、画布/78.8×51.5cm/1896年(東京国立文化財研究所蔵)
31. 昔語り下絵(仲居) 油彩、画布/94×47.9cm/1896年(東京国立文化財研究所蔵)
32. 昔語り下絵(舞妓) 油彩、画布/94.7×47cm/1896年(東京国立文化財研究所蔵)
33. 裸体習作 木炭、紙/61.5×47cm/1887年頃(東京国立文化財研究所蔵)
34. 裸婦習作 木炭、紙/62.5×47.3cm/1888年(東京国立文化財研究所蔵)
35. 裸体習作 木炭、紙/63×47cm/1888年(東京国立文化財研究所蔵)
36. 女の顔 木炭、紙/62.5×47.4cm/1889年(東京国立文化財研究所蔵)
37. 裸体習作 木炭、紙/62.5×47cm/1889年(東京国立文化財研究所蔵)

- 
38. 編物する女 木炭, 紙/62.5×47.5cm/1890年頃(東京国立文化財研究所蔵)  
39. 夏図画稿・女の顔 木炭, 紙/47.5×31.5cm/1892年頃(東京国立文化財研究所蔵)  
**藤 雅三(1853—1916)**

40. フランス風景 油彩, 画布/32.5×46cm(東京国立博物館蔵)

**久米桂一郎(1866—1934)**

41. 裸婦 油彩, 画布/59.3×49cm/1890年(東京国立博物館蔵)  
42. 寒林枯葉 油彩, 画布/44.4×60.2cm/1891年(東京芸術大学蔵)  
43. 晩秋 油彩, 画布/73×98cm/1892年(久米美術館蔵)  
44. 夏の夕(鎌倉の景) 油彩, 画布/42.3×55.1cm/1894年(東京芸術大学蔵)  
45. 裸体習作 木炭, 紙/61×47cm/1887年(久米美術館蔵)  
46. 裸体習作 木炭, 紙/61.8×46.5cm/1887年(久米美術館蔵)  
47. 裸婦習作 木炭, 紙/62×47.5cm/1887年(久米美術館蔵)  
48. 裸婦習作 木炭, 紙/62×47cm/1888年(久米美術館蔵)  
49. 裸婦習作 木炭, 紙/62×47cm/1889年(久米美術館蔵)

**岡田三郎助(1869—1939)**

50. 西洋婦人像 油彩, 画布/46.5×35.2cm/1898年(東京芸術大学蔵)  
51. ムードンの夕暮 油彩, 画布/54.3×65.7cm/1899年(東京芸術大学蔵)  
52. 臥裸婦 油彩, 画布/45×91.5cm/1900年(石橋美術館蔵)  
53. 薔薇の少女 油彩, 画布/119×79cm/1901年(石橋美術館蔵)  
54. 婦人像 油彩, 画布/73×61cm/1907年(ブリヂストン美術館蔵)  
55. 萩 油彩, 画布/124.2×80.3cm/1908年(兵庫県立近代美術館蔵)  
56. 髪梳く女 油彩, 画布/60×46cm/1915年(石橋美術館蔵)  
57. 水浴の前 油彩, 画布/200×76cm/1916年(石橋美術館蔵)

**和田英作(1874—1959)**

58. 少女新聞を読む 油彩, 画布/54.8×84.8cm/1897年(東京芸術大学蔵)  
59. 読書 油彩, 画布/73×53.5cm/1902年(石橋美術館蔵)  
60. 思郷 油彩, 画布/95.8×67.3cm/1902年(東京芸術大学蔵)  
61. おうな 油彩, 画布/93.8×136.7cm/1908年(東京国立近代美術館蔵)

**白瀧幾之助(1873—1960)**

62. 稽古 油彩, 画布/135×195.5cm/1897年(東京芸術大学蔵)

**山下新太郎(1881—1966)**

63. 読書 油彩, 画布/92×73cm/1908年(ブリヂストン美術館蔵)  
64. ノラ・ファルク嬢 油彩, 画布/46×38cm/1908年(ブリヂストン美術館蔵)  
65. シュザンヌ 油彩, 画布/53×43cm/1909年(ブリヂストン美術館蔵)  
66. 靴の女 油彩, 画布/71.7×59.8cm/1910年(東京国立近代美術館蔵)

**斎藤豊作(1880—1951)**

67. フランス風景Ⅰ 油彩, 画布/80.3×65.2cm/1910年頃(埼玉県立近代美術館蔵)

**児島虎次郎(1881—1929)**

68. 里の水車 油彩, 画布/87×141cm/1906年(大原美術館蔵)  
69. 岸の森 油彩, 画布/64.5×79.5cm/1908年(大原美術館蔵)  
70. 凝視 油彩, 画布/116×89cm/1909年(大原美術館蔵)  
71. ベゴニヤの畠 油彩, 画布/91×118cm/1910年(大原美術館蔵)

**ジャン=ポール・ローランス(1838—1921)**

72. アンギアン公の処刑 油彩, 画布/162.5×104.3cm/1872年(アランソン美術館蔵)  
73. 聖務停止 油彩, 画布/116×181cm/1875年(ル・アーヴル美術館蔵)  
74. ポルトガルのイザベルの棺の前のフランソワ・ド・ボルジア 油彩, 画布/229×157cm/1876年(プレスト美術館蔵)  
75. マルソー将軍の遺体の前のオーストリアの参謀たち 油彩, 画布/210×300cm/1877年

- 
76. 待つ 油彩, 画布/40.5×27cm
  77. ひざまづく修道士の習作 油彩, 画布/46×38cm
  78. 聖ジュヌヴィエーヴの死 油彩, 画布/65.5×50cm
  79. 聖ジュヌヴィエーヴの死の習作 油彩, 画布/40.1×29.1cm/1880年(ポワティエ市立美術館蔵)
  80. 聖ジュヌヴィエーヴの死の習作 油彩, 画布/41×27.5cm(プレスト美術館蔵)
  81. パンテオンの装飾のための習作 油彩, 画布/26.5×21.3cm
  82. ペーターヴェン讚 木炭, パステル, 淡彩, グワッシュ/51×31cm

**鹿子木孟郎(1874—1941)**

83. 白衣の少女 油彩, 画布/56.1×73.6cm/1901-03年頃(京都工芸繊維大学蔵)
84. 裸婦 油彩, 画布/80.4×44.2cm/1902年頃(北海道立近代美術館蔵)
85. 裸婦(エチュード) 油彩, 画布/77×43.5cm/1903年
86. 裸婦(エチュード) 油彩, 画布/78.5×43.5cm/1901-03年頃
87. 新夫人 油彩, 画布/94×90cm/1909年(京都市美術館蔵)
88. 画家の妻 油彩, 画布/90×114cm/1921年
89. 裸婦 油彩, 画布/151.5×106.3cm(株式会社福武書店蔵)
90. 裸体習作 木炭, 紙/62.5×48cm/1902年
91. 裸体習作 木炭, 紙/62.5×48cm/1902年
92. 裸体習作 木炭, 紙/62.5×48cm/1902年

**中村不折(1866—1943)**

93. 裸婦立像 油彩, 画布/78×44.5cm/1903年頃(三重県立美術館蔵)
94. 老漁夫 油彩, 画布/167×97cm/1906年
95. 落椿 油彩, 画布/117×80cm/1912年(福富太郎コレクション)
96. 廓然無聖 油彩, 画布/193.5×142.5cm/1914年(東京国立近代美術館蔵)
97. 裸体習作 木炭, 紙/63×48cm/1901-05年頃(書道博物館蔵)
98. 裸体習作 木炭, 紙/63×48cm/1902年(書道博物館蔵)
99. 裸体習作 木炭, 紙/63×48cm/1901-05年(書道博物館蔵)
100. 裸婦習作 木炭, 紙/63×48cm/1902年(書道博物館蔵)
101. 裸婦習作 木炭, 紙/63×48cm/1901-05年頃(書道博物館蔵)

**満谷国四郎(1874—1936)**

102. 裸婦 油彩, 画布/80.3×65.2cm/1900年頃(三重県立美術館蔵)
103. かりそめの悩み 油彩, 画布/134×88cm/1907年
104. 二階 油彩, 画布/105.5×120.6cm/1910年(東京国立博物館蔵)
105. 椅子による裸婦 油彩, 画布/79.5×64cm/1912年(東京国立近代美術館蔵)
106. 坐婦(画室内小景) 油彩, 画布/65×54.5cm/1912年(石橋美術館蔵)

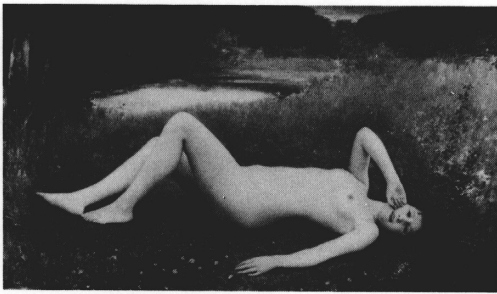
**安井曾太郎(1888—1955)**

107. 田舎の寺 油彩, 画布/46.5×55cm/1909年(京都国立近代美術館蔵)
108. 風景 油彩, 画布/37.9×45.5cm/1911年
109. 足を洗う女 油彩, 画布/116.5×88.8cm/1913年(群馬県立近代美術館蔵)
110. 裸婦習作 木炭, 紙/62.5×48cm/1907-10年頃(東京芸術大学蔵)
111. 裸婦習作 木炭, 紙/62.5×48cm/1907-10年頃(東京芸術大学蔵)
112. 裸婦習作 木炭, 紙/62.5×48cm/1907-10年頃(東京芸術大学蔵)
113. 裸体習作 木炭, 紙/62.5×48cm/1907-10年頃(東京芸術大学蔵)
114. 裸体習作 木炭, 紙/62.5×48cm/1907-10年頃(東京芸術大学蔵)

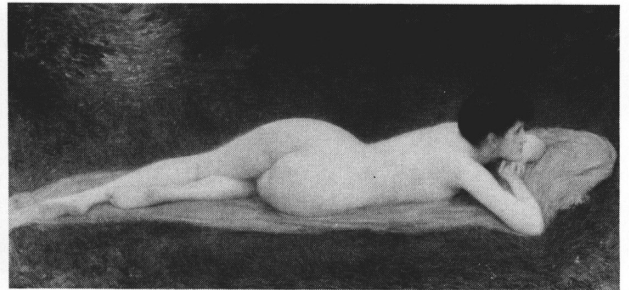
**フェルナン・コルモン(1845—1924)**

115. カリエ=ベルーズの肖像 油彩, 画布/81.5×66cm/1877年(パリ, プティ・パレ美術館蔵)
116. 熊狩りからの帰還 油彩, 画布/150×200cm/1882年(カルカソンヌ美術館蔵)
117. 製鉄所 油彩, 画布/59×78cm/1893年(トゥールコワン美術館蔵)

118. 鉄の時代 油彩, 画布/65×80.5cm/1914年(パリ, プティ・パレ美術館蔵)  
**カロリュス=デュラン(1837—1917)**  
 119. 手袋の婦人 油彩, 画布/228×164cm/1869年(オルセ美術館蔵)  
 120. エティエンヌ・アロの肖像 油彩, 画布/73.5×60cm/1873年(パリ, プティ・パレ美術館蔵)  
 121. G.F.(フェドー)夫人の肖像 油彩, 画布/190.5×127.8cm/1897年(国立西洋美術館蔵)  
 122. オーガスタス・コー・ガーニーの肖像 油彩, 画布/116×92.5cm/1910年(パリ, プティ・パレ美術館蔵)  
 123. 病み上がり 油彩, 画布/99×126.5cm(オルセ美術館蔵)  
**藤島武二(1867—1943)**  
 124. 裸婦 油彩, 画布/79.6×75.4cm/1906年頃(三重県立美術館蔵)  
 125. ヴェルサイユ風景 油彩, 画布/73×91cm/1906-07年(石橋美術館蔵)  
 126. 黒扇 油彩, 麻布(板に貼付け)/64×41.5cm/1908-09年(ブリヂストン美術館蔵)  
 127. チョチャラ 油彩, 画布/45×38cm/1908-09年(ブリヂストン美術館蔵)  
 128. うつつ 油彩, 画布/65.1×51.7cm/1913年(東京国立近代美術館蔵)



2



10



展覧会ポスター



6



31



28



72



74



78



87



96



83



116



119



123



126

## 《地方展》

珠玉のブリヂストン美術館コレクション

### 近代ヨーロッパ美術の巨匠たち

1983年9月20日(火)―10月16日(日)(月曜休館/24日間)

会場：愛媛県立美術館

主催：愛媛県立美術館/石橋財団ブリヂストン美術館/愛媛新聞社

後援：愛媛県教育委員会/愛媛県文化振興財団/松山市教育委員会/愛媛県下市町村教育委員会/愛媛県美術会/NHK松山  
放送局/南海放送/テレビ愛媛/FM愛媛

出品内容：フランス絵画69点，版画5点，彫刻16点 計90点

入場者総数：27,619人

## 《その他の記録》

当館制作のビデオテープ《印象派の展開——フランスの巨匠たち——》を、1983年度分として、北海道、東北、北陸、中部地方15道県の高校のうち、希望校1,276校に寄贈した。

《土曜講座》

通算回数	月日	講座題目	講師
<b>《日本ギリシャ協会10周年記念——第10回ギリシャの文化と美術》(前年度からのつづき)</b>			
1302	1983年 4月2日 (4)	ホメロスの世界	松平千秋氏
1303	4月9日 (5)	星座とギリシャ神話	引地正俊氏
1304	4月16日 (6)	ギリシャの医学と科学技術	緒方富雄氏
1305	4月23日 (7)	ギリシャ人と自由—ホメロスとプラトン	斎藤忍随氏
1306	4月30日 (8)	バルテノン神殿の歴史	嘉門安雄
<b>《青木繁展開催記念——ヨーロッパ世紀末美術と明治浪漫主義》</b>			
1307	5月7日 (1)	ブレイク、ロセッティと日本芸術	由良君美氏
1308	5月14日 (2)	青木繁の生涯と作品	三輪英夫氏
1309	5月21日 (3)	青木繁とヨーロッパ象徴派絵画	高階秀爾氏
1310	5月28日 (4)	青木繁にみるイギリス絵画の影響	阿部信雄
1311	6月4日 (5)	〈世紀末〉とは何か	阿部良雄氏
1312	6月11日 (6)	藤島武二と明治浪漫主義美術	陰里鉄郎氏
1313	6月18日 (7)	アール・ヌーヴォーと藤島武二	島田紀夫氏
<b>《ジャポネズリー研究会夏期連続講演会——東と西の邂逅》</b>			
1314	7月19日 (1)	フランス美術にみるジャポニスムの変遷—印象派から世紀末まで	中山公男氏
1315	7月16日 (2)	明治の翔んだ女—洋行芸人始末記	倉田喜弘氏
1316	7月23日 (3)	ウィーンの世紀末美術とジャポニスム	池内 紀氏
1317	7月30日 (4)	ヨーロッパの風俗音楽にみる日本—オペラ〈ミカド〉の変遷	保柳 健氏
1318	8月6日 (5)	モネと浮世絵版画—ジヴェルニーのコレクションをめぐって	小林利延氏
1319	8月13日 (6)	ピアズリーと世紀末	河村錠一郎氏
<b>《日本近代洋画の巨匠とフランス展開催記念講演会》</b>			
1320	9月17日 (1)	ジャン=ポール・ローランスと日本の弟子たち—鹿子木孟郎を中心に	島田康寛氏
1321	9月24日 (2)	懐かしのボンピエたち—ボードレールからみたフランス・アカデミスムの絵画	阿部良雄氏



通算回数	月日	講座題目	講師
1322	10月1日 (3)	神話・伝説・物語——近代日本の歴史画——	阿部信雄
1323	10月8日 (4)	日本洋画のアカデミスム形成とフランス——黒田・久米・岡田らを中心として——	陰里鉄郎氏
1324	10月15日 (5)	藤島武二, あるいは東洋への回帰——	酒井忠康氏
1325	10月22日 (6)	ヨーロッパのブルジョワ・レアリスム——	高階秀爾氏
<b>《地中海学会秋期連続講演会——地中海の都市(Ⅲ)》</b>			
1326	11月12日 (1)	アル=フスタート——イスラーム都市の発掘より——	川床睦夫氏
1327	11月19日 (2)	セビーリャ——異文化への門戸——	神吉敬三氏
1328	11月26日 (3)	アテネ——その失われた世界——	西村太良氏
1329	12月3日 (4)	チュニス——イスラーム都市の人類学——	宮治美江子氏
1330	12月10日 (5)	ペイルート——その古代と現代——	牟田口義郎氏
1331	12月17日 (6)	パレルモ——ヨーロッパとイスラームの接点——	伊東俊太郎氏
<b>《コートールド・コレクション公開記念——印象派と後期印象派》</b>			
1332	1984年 1月14日 (1)	コートールド美術研究所とそのコレクション——	デニス・ファー氏 (通訳: 阿部信雄)
1333	1月21日 (2)	ゴッゲン《ネヴァーモア》——	島田紀夫氏
1334	1月28日 (3)	セザンヌ《カルタ遊びの人たち》——	中山公男氏
1335	2月4日 (4)	マネ《フォリー・ベルジェール劇場のバー》——	高階秀爾氏
1336	2月11日 (5)	セザンヌ《サント・ヴィクトワール山》——	嘉門安雄
1337	2月18日 (6)	スーラ《白粉を塗る女》——	黒江光彦氏
1338	2月25日 (7)	ドガ《舞台の二人の踊り子》——	大森達次
<b>《イギリスの文化と美術》</b>			
1339	3月3日 (1)	北方画家とイギリス——	海津忠雄氏
1340	3月10日 (2)	アーサー王伝説と英国近代絵画——	高宮利行氏
1341	3月17日 (3)	ホガース, その《描かれた道徳》——	森 洋子氏
1342	3月24日 (4)	英国の演劇——	細井雄介氏
1343	3月31日 (5)	ターナーとカンスタブル——	阿部信雄

## 主な記録 石橋美術館

### 《特別展》

アール・ヌーヴォーの華

#### アルフォンス・ミュシャ展

1983年7月30日(土)―8月28日(日)(月曜休館/26日間)

主催：石橋財団石橋美術館/ブラハ国立美術館/西日本新聞社/テレビ西日本/アルフォンス・ミュシャ展開催委員会

後援：外務省/文化庁/チェコスロバキア文化省/在日チェコスロバキア大使館

出品内容：油彩・水彩106点、素描11点、リトグラフ82点、ブロンズ・絵皿等9点 計208点

入場者総数：17,571人

#### アルフォンス・ミュシャ(1860―1939)

1. 『ファウスト』からの情景 木炭、紙/85×64.2cm/1888年頃(イージー・ムハ・コレクション)
2. 幻影 木炭、紙/82.8×60.5cm/1888年頃(イージー・ムハ・コレクション蔵)
3. ファエトンの墜落 黒チョーク、淡彩、紙/58×79cm/1890年頃(イヴァンチツェ、ブルノー近郊博物館蔵)
4. ステンド・グラスの窓のための下絵：聖バルバラの斬首 黒チョーク、白のハイライト、紙/52.2×34.3cm/1895年以後(イージー・ムハ・コレクション)
5. ヴァレンシュタインの死 筆、墨、淡彩、白のハイライト、カルトン/60.3×48.6cm/1897年以前(ブラハ国立美術館蔵)
6. マクデブルクの略奪 筆、墨、淡彩、白のハイライト、紙/60×48cm/1897年以前(ピルゼン、西ボヘミア美術館蔵)
7. シャルル・セニョボス著『スペイン史』の挿絵 水彩、白のハイライト、紙/43.7×32.3cm/1895年以後(イージー・ムハ・コレクション)
8. シャルル・セニョボス著『スペイン史』の挿絵 油彩、板/57.4×42cm/1895年以後(イージー・ムハ・コレクション)
9. お伽話 水彩、墨、白のハイライト、紙/30.5×20cm/1896年以前(ブラハ、中部ボヘミア美術館蔵)
10. <ノートルダム石像>のポスターのための下絵 鉛筆、水彩、紙/52×37cm/1895年頃(イージー・ムハ・コレクション)
11. 『ジスモンダ』のポスター カラー・リトグラフ/213×75cm/1895年(ブラハ産業美術博物館蔵)
12. サロン・デ・サン第20回展ポスター カラー・リトグラフ/64×43cm/1896年(ピルゼン、西ボヘミア博物館蔵)
13. 『椿姫』のポスター カラー・リトグラフ/208×74.5cm/1896年(ピルゼン、西ボヘミア博物館蔵)
14. サラ・ベルナルの顔：『ロレンザッチオ』のポスターのための習作 鉛筆、紙/25×21.5cm/1896年(イージー・ムハ・コレクション)
15. 『ロレンザッチオ』のポスター カラー・リトグラフ/208×76.5cm/1896年(ピルゼン、西ボヘミア博物館蔵)
16. ポスター：サラ・ベルナル カラー・リトグラフ/61.5×41cm/1896年(ピルゼン、西ボヘミア博物館蔵)
17. 民衆美術協会のポスター カラー・リトグラフ/61.5×45cm/1897年(ブルノー、モラヴィア美術館蔵)
18. カサン・フィス印刷所のポスター カラー・リトグラフ/171×69cm/1897年(ドイツ・コレクション)
19. <リュイナル・ジャンペン>のポスターのための下絵 鉛筆、水彩、金泥、カルトン/58.8×22.1cm/1897年(イージー・ムハ・コレクション)
20. <リュイナル・ジャンペン>のポスター カラー・リトグラフ/174×58.5cm/1897年(ブラハ産業美術博物館蔵)
21. 巻タバコ用紙<ジョブ>のポスター(小) カラー・リトグラフ/55.5×43cm/1897年(ドイツ・コレクション)
22. 『サマリアの女』のポスター カラー・リトグラフ/167×54cm/1897年(ピルゼン、西ボヘミア博物館蔵)
23. サロン・デ・サンでのミュシャ作品展ポスター カラー・リトグラフ/63×43.5cm/1897年(ピルゼン、西ボヘミア博物館蔵)
24. <ムーズ川のビール>のポスター(文字なし) カラー・リトグラフ/141.5×89cm/1897年(ピルゼン、西ボヘミア博物館蔵)
25. <トラピスティーヌ酒>のポスター カラー・リトグラフ/208×75.5cm/1897年(イージー・ムハ・コレクション)
26. ポスター<モナコーモンテカルロ> カラー・リトグラフ/110×76cm/1897年(ドイツ・コレクション)
27. <インカ族の酒>のポスター(小版) カラー・リトグラフ/13.6×36cm/1897年(イージー・ムハ・コレクション)
28. <ジョブ>のポスター(大) カラー・リトグラフ/141×94cm/1898年(イージー・ムハ・コレクション)
29. 『メディア』のポスター カラー・リトグラフ/208×75cm/1898年(イージー・ムハ・コレクション)
30. 『トスカ』のポスター カラー・リトグラフ/103×36cm/1899年(ドイツ・コレクション)
31. 『ハムレット』のポスター カラー・リトグラフ/208×76.7cm/1899年(イージー・ムハ・コレクション)
32. モエ・エ・シャンドンの<ドライ・アンペリアル>のポスター カラー・リトグラフ/58×19.5cm/1899年(イージー・ムハ・コレクション)

33. 1900年パリ万国博オーストリア部門のポスター左半分 ミュンシャによって手彩色されたリトグラフ/100×35.5cm/1900年(イージー・ムハ・コレクション)
34. アカデミー・コラロッシにおける ミュンシャ講座のポスター カラー・リトグラフ/64×27cm/1900-01年頃(イージー・ムハ・コレクション)
35. ミュンシャ『装飾資料集』のポスター カラー・リトグラフ/70×40.5cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)
36. 黄道十二宮:『ラ・プリュム』誌のためのカレンダー カラー・リトグラフ/66.5×48.2cm/1896-97年(イージー・ムハ・コレクション)
37. 春, 連作〈四季〉より カラー・リトグラフ/94.5×48cm/1896年(ドイツ・コレクション)
38. 夏, 連作〈四季〉より カラー・リトグラフ/92×49cm/1896年(ドイツ・コレクション)
39. 秋, 連作〈四季〉より カラー・リトグラフ/92×49.5cm/1896年(ドイツ・コレクション)
40. 冬, 連作〈四季〉より カラー・リトグラフ/96×48.5cm/1896年(ドイツ・コレクション)
41. 〈ショコラ・マッソン〉:カレンダー —1月, 2月, 3月 カラー・リトグラフ/42×14.5cm/1896年(ドイツ・コレクション)
42. 〈ショコラ・メキシカン〉:カレンダー —4月, 5月, 6月 カラー・リトグラフ/42×14.5cm/1896年(ドイツ・コレクション)
43. 〈ショコラ・マッソン〉:カレンダー —7月, 8月, 9月 カラー・リトグラフ/42×14.5cm/1896年(ドイツ・コレクション)
44. 〈ショコラ・メキシカン〉:カレンダー —10月, 11月, 12月 カラー・リトグラフ/42×14.5cm/1896年(ドイツ・コレクション蔵)
45. 夢想 カラー・リトグラフ/64×47.5cm/1897年(ドイツ・コレクション)
46. 春:装飾パネルのための下絵(下絵のみで実現せず) 青チョーク, 水彩, 紙/42.3×16cm/1897年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
47. 夏:装飾パネルのための下絵(下絵のみで実現せず) 青チョーク, 水彩, 紙/42.3×16cm/1897年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
48. 秋:装飾パネルのための下絵(下絵のみで実現せず) 青チョーク, 水彩, 紙/42.3×16cm/1897年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
49. 冬:装飾パネルのための下絵(下絵のみで実現せず) 青チョーク, 水彩, 紙/42.3×16cm/1897年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
50. 壮年, 連作〈人生の四期〉より カラー・リトグラフ/19×22cm/1897年(ドイツ・コレクション)
51. ビザンティン風の頭部:ブロード カラー・リトグラフ/36.2×44.8cm/1897年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
52. ビザンティン風の頭部:ブルネット カラー・リトグラフ/36.2×46cm/1897年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
53. 百合, 連作〈四つの花〉より カラー・リトグラフ/100×41cm/1898年(イージー・ムハ・コレクション)
54. カーネーション, 連作〈四つの花〉より カラー・リトグラフ/100×41cm/1898年(イージー・ムハ・コレクション)
55. 薔薇, 連作〈四つの花〉より カラー・リトグラフ/100×41cm/1898年(イージー・ムハ・コレクション)
56. アイリス, 連作〈四つの花〉より カラー・リトグラフ/100×41cm/1898年(イージー・ムハ・コレクション)
57. 果実 カラー・リトグラフ/60×36.5cm/1898年(ドイツ・コレクション)
58. 花 カラー・リトグラフ/60×36.5cm/1898年(ドイツ・コレクション)
59. 詩, 連作〈四芸術〉より カラー・リトグラフ/56.5×35cm/1898年(ドイツ・コレクション)
60. ダンス, 連作〈四芸術〉より カラー・リトグラフ/56.5×35cm/1898年(ドイツ・コレクション)
61. 絵画, 連作〈四芸術〉より カラー・リトグラフ/56.5×35cm/1898年(ドイツ・コレクション)
62. 音楽, 連作〈四芸術〉より カラー・リトグラフ/56×35cm/1898年(ドイツ・コレクション)
63. 黄昏 カラー・リトグラフ/45×87.5cm/1899年(ドイツ・コレクション)
64. 朝の目覚め カラー・リトグラフ/107×41cm/1899年(ドイツ・コレクション)
65. 昼の輝き カラー・リトグラフ/107×41cm/1899年(ドイツ・コレクション)
66. タベの夢想 カラー・リトグラフ/107×41cm/1899年(ドイツ・コレクション)
67. 夜の安らぎ カラー・リトグラフ/107×41cm/1899年(ドイツ・コレクション)
68. モエ・エ・シャンドンのメニュー カラー・リトグラフ/21×14cm/1899年(ドイツ・コレクション)
69. モエ・エ・シャンドンのメニュー カラー・リトグラフ/21×14cm/1899年(ドイツ・コレクション)
70. モエ・エ・シャンドンのメニュー カラー・リトグラフ/21×14cm/1899年(ドイツ・コレクション)

71. モエ・エ・シャンドンのメニュー カラー・リトグラフ/21×14cm/1899年(ドイ・コレクション)
72. 通り過ぎる風が若さを奪い去る カラー・リトグラフ/59.5×44.7cm/1899年(イージー・ムハ・コレクション)
73. 夜明け 水彩, 紙/62×30cm/1899年(ゴットワルドフ美術館蔵)
74. トパーズ, 連作<四つの宝石>より カラー・リトグラフ/62×24.5cm/1900年(ドイ・コレクション)
75. ルビー, 連作<四つの宝石>より カラー・リトグラフ/62×24.5cm/1900年(ドイ・コレクション)
76. アメジスト, 連作<四つの宝石>より カラー・リトグラフ/62×24.5cm/1900年(ドイ・コレクション)
77. エメラルド, 連作<四つの宝石>より カラー・リトグラフ/62×24.5cm/1900年(ドイ・コレクション)
78. つた カラー・リトグラフ/62.5×45cm/1901年(ドイ・コレクション)
79. 月桂樹 カラー・リトグラフ/62.5×45cm/1901年(ドイ・コレクション)
80. イヴァンチツェの思い出 パステル, 黒チョーク, 紙/45×27cm/1903年(イヴァンチツェ, ブルノー近郊博術館蔵)
81. 挿絵のための習作 鉛筆, 墨, 淡彩, カルトン/47×39.3cm/1897年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
82. ロベール・ド・フレール著『トリポリの姫君イルゼ』252部限定版, H.ピアジ編集, シャンプノワ印刷アルフォンス・ミュシャの手になる132のリトグラフの挿絵, 表紙, 10の装飾頭文字, 花装飾, 装飾模様を含む/1897年(ドイ・コレクション蔵)
83. 絵画:装飾口絵のための下絵 ペン, 墨, 水彩, カルトン/25.9×37.3cm/1897年(イージー・ムハ・コレクション)
84. スラヴィーコヴァー=ウエルソヴァー夫人の肖像 鉛筆, 水彩, 白のハイライト, 紙/28.3×23.9cm/1897年(イージー・ムハ・コレクション)
85. オーストリア=ハンガリー慈善団体のメニュー ペン素描に基づく エングレイヴィング/27×19cm/1898年(ドイ・コレクション)
86. 『レスタンブ・モデルヌ』誌の表紙 リトグラフ/40×27cm/1897年(ドイ・コレクション)
87. 4月, 『ココリコ』誌のための連作<12カ月>より 鉛筆, 白のハイライト, 紙/40.8×32.4cm/1899年(イージー・ムハ・コレクション)
88. 6月, 『ココリコ』誌のための連作<12カ月>より 鉛筆, 白のハイライト, 紙/40.1×32.1cm/1899年(イージー・ムハ・コレクション)
89. 9月, 『ココリコ』誌のための連作<12カ月>より 鉛筆, 白のハイライト, カルトン/40.7×27.8cm/1899年(イージー・ムハ・コレクション)
90. アナトール・フランス著『クリオ』の口絵のための習作 黒チョーク, 水彩, 紙/28×19cm/1899年(ピルゼン, 西ボヘミア美術館蔵)
91. アナトール・フランス著『クリオ』のための挿絵 ペン, 墨, カルトン/38×57cm/1899年(イージー・ムハ・コレクション)
92. 岩に坐る裸婦 ブロンズ/H.27cm/1898-99年(イージー・ムハ・コレクション)
93. ひな菊をもつ女 絹地にプリント/55×79cm/1897-98年(ピルゼン, 西ボヘミア美術館)
94. <ルフェーヴル=ユティル・ビスケット>の蓋と把手付き金属容器 金属にプリント/高さ:16cm 直径13.5;11.5cm/1899年(イージー・ムハ・コレクション)
95. <ルフェーヴル=ユティル・ビスケット>の容器 印刷した紙を貼ったブリキ箱/1900年以後(イージー・ムハ・コレクション)
96. 肘掛け椅子の裸婦習作 青チョーク, 紙/54.8×49cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)
97. ガラスの器をもって坐る裸婦の習作 青チョーク, カルトン/57.5×43cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)
98. 立てる少女の習作 青および褐色のチョーク, カルトン/65×30.6cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)
99. 『装飾資料集』図19のための素描 ペン, 墨, 白のハイライト, カルトン/60×40cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)
100. 『装飾資料集』図34のための素描 鉛筆, ペン, 墨, 白のハイライト, 紙/54×38cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)
101. 『装飾資料集』図45のための素描 ペン, 墨, カルトン/43×38cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)
102. 『装飾資料集』図47のための素描 ペン, 墨, 灰緑色紙/58.1×46.7cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)
103. 『装飾資料集』図49のための素描 鉛筆, 白のハイライト, カルトン/51×39cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)
104. 『装飾資料集』図67のための素描 鉛筆, 白のハイライト, カルトン/60×40cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)

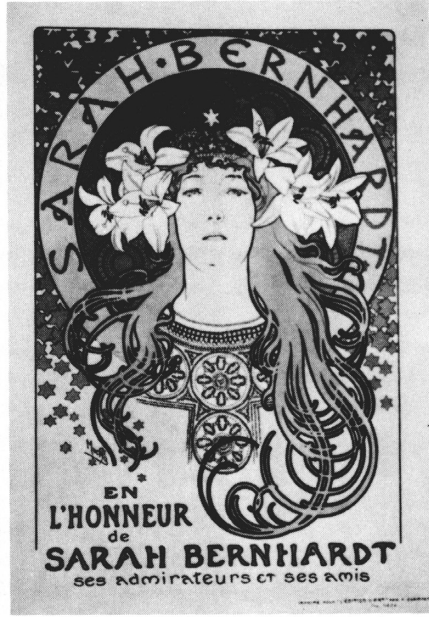
105. 『装飾資料集』図72のための素描 鉛筆, 白のハイライト, カルトン/52×39cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)
106. 『装飾人物集』図14のための素描 鉛筆, 白のハイライト, カルトン/61.3×49.3cm/1905年(イージー・ムハ・コレクション)
107. 『装飾人物集』図21のための素描 鉛筆, 白のハイライト, カルトン/61.3×48cm/1905年(イージー・ムハ・コレクション)
108. 『装飾人物集』図26のための素描 ペン, 白のハイライト, カルトン/63×48cm/1905年(イージー・ムハ・コレクション)
109. 『装飾人物集』図27のための素描 ペン, 白のハイライト, カルトン/63×48cm/1905年(イージー・ムハ・コレクション)
110. 『装飾人物集』図31のための素描 鉛筆, 白のハイライト, カルトン/62.5×48.5cm/1905年(イージー・ムハ・コレクション)
111. 百合の中の聖母 テンペラ, カンヴァス/250×210cm/1905年(イージー・ムハ・コレクション)
112. 『ウィナー・シック』誌のための表紙(バリの『ル・シック』誌のために1898年に描いた素描を使用) カラー・リトグラフ/37.5×27.5cm/1905年(ドイツ・コレクション)
113. <真福八端>『エヴリボディーズ・マガジン』12月号の7ページ・カラー付録)のタイトル・ページ ペン, 墨, 水彩, カルトン/60×42.9cm/1906年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
114. <真福八端>より「幸福なるかな, 心の貧しき者…」 水彩, グワッシュ, 紙/61.5×43cm/1906年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
115. <真福八端>より「幸福なるかな, 悲しむ者…」 水彩, グワッシュ, 紙/61.5×43cm/1906年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
116. <真福八端>より「幸福なるかな, 憐憫ある者…」 水彩, グワッシュ, 紙/61.5×43cm/1906年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
117. <真福八端>より「幸福なるかな, 心清き者…」 水彩, グワッシュ, 紙/61.5×43cm/1906年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
118. <真福八端>より「幸福なるかな, 義のために責められたる者…」 水彩, グワッシュ, 紙/61.5×43cm/1906年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
119. <真福八端>より「幸福なるかな, 柔和なる者…」 水彩, グワッシュ, 紙/61.5×43cm/1906年(ブルノー, モラヴィア美術館蔵)
120. 包装紙のデザイン:すみれ 鉛筆, 水彩, 白のハイライト, カルトン/44×14cm/1907年(ピルゼン, 西ボヘミア美術館蔵)
121. 包装紙のデザイン:ライラック 鉛筆, 水彩, カルトン/44×14cm/1907年(ピルゼン, 西ボヘミア美術館蔵)
122. 包装紙のデザイン:ヘリオトローブ 鉛筆, 水彩, カルトン/44×14cm/1907年(ピルゼン, 西ボヘミア美術館蔵)
123. 包装紙のデザイン:びゃくだん 鉛筆, 水彩, 白のハイライト, カルトン/44×14cm/1907年(ピルゼン, 西ボヘミア美術館蔵)
124. 喜劇:ドイツ劇場(ニューヨーク)の装飾のための下絵 テンペラ, 油彩, カンヴァス/117×58.5cm/1908年(イージー・ムハ・コレクション)
125. 悲劇:ドイツ劇場(ニューヨーク)の装飾のための下絵 テンペラ, 油彩, カンヴァス/117×58.5cm/1908年(イージー・ムハ・コレクション)
126. 美の誕生:ドイツ劇場(ニューヨーク)の装飾のための下絵 鉛筆, グワッシュ, 紙/38.5×128cm/1908年(プラハ国立美術館蔵)
127. 『十二夜』の舞台装置デザイン 鉛筆, 水彩, 白のハイライト, カルトン/47.8×62.8cm/1908年(イージー・ムハ・コレクション)
128. 赤毛の婦人の肖像 パステル, 灰色紙/94.8×59.9cm/1908年(イージー・ムハ・コレクション)
129. 女優モード・アダムの肖像習作 鉛筆, 白のハイライト, 紙/49.5×44cm/1908年(イージー・ムハ・コレクション)
130. ジャンヌ・ダルクに扮するモード・アダムス 鉛筆, 水彩, 紙/46×31cm/1908年(イージー・ムハ・コレクション)
131. チェロ奏者ズデンカ・チェルナーのポスター カラー・リトグラフ/102×104cm/1913年(イージー・ムハ・コレクション)
132. ブルックリン美術館でのミュシャ展ポスター カラー・リトグラフ/49×31cm/1921年(イージー・ムハ・コレクション)
133. ヴィンシュコフでの商業・工業・民族展ポスター カラー・リトグラフ/115×50cm/1902年(ピルゼン, 西ボヘミア美術館蔵)

134. ホジツェでの北東ボヘミア商業・工業・芸術展ポスター カラー・リトグラフ/149×56cm/1903年(ビルゼン, 西ボヘミア美術館蔵)
135. ブラハ市民会館市長ホール天井画下絵 油彩, カンヴァス/直径50cm/1910-11年(イージー・ムハ・コレクション)
136. ブラハ市民会館市長ホール壁画下絵 ペン, 水彩, 紙/30×93.5cm/1911年(イージー・ムハ・コレクション)
137. ブラハ市民会館市長ホール壁画下絵 ペン, 水彩, 紙/30×93.5cm/1911年(イージー・ムハ・コレクション)
138. ブラハ市民会館壁画下絵:力によって自由へ 油彩, カンヴァス/45.7×63.2cm/1911年(イージー・ムハ・コレクション)
139. 『ヒヤシンス姫』のポスター カラー・リトグラフ/117.5×78.5cm/1911年(イージー・ムハ・コレクション)
140. モラヴィア教師合唱団のポスター カラー・リトグラフ/105.5×77cm/1911年(ブラハ産業美術館蔵)
141. イヴァンチツェでの地方展ポスター カラー・リトグラフ/89.5×48.5cm/1911年(ドイツ・コレクション)
142. 挙国一致宝くじのポスター カラー・リトグラフ/128×95cm/1912年(ドイツ・コレクション)
143. ブラハでの歌と音楽の春季祭典ポスター カラー・リトグラフ/143×71cm/1914年(イヴァンチツェ, プルノー近郊博物館蔵)
144. ルージチカ・アポロ蔵書票 ペン, 墨, 水彩, カルトン/7.3×6cm/1918年(ビルゼン, 西ボヘミア美術館蔵)
145. 50クラウン紙幣と10クラウン紙幣(裏面) 印刷/7.7×15.4cm, 8×13.3cm/(イージー・ムハ・コレクション)
146. 100クラウン紙幣(両面) 印刷/11×16.1cm, 10.4×16cm/(イージー・ムハ・コレクション)
147. 第8回体育協会祭ポスター カラー・リトグラフ/120×8.4cm/1925年(ドイツ・コレクション)
148. <1918—1928>:チェコスロヴァキア独立10周年のポスター カラー・リトグラフ/116.6×78.5cm/1928年(ドイツ・コレクション)
149. <スラヴ叙事詩>展ポスター カラー・リトグラフ/124×82cm/1928年(ドイツ・コレクション)
150. ブラハ聖ヴィタ大聖堂のステンド・グラスの窓のデザイン ペン, 墨, 水彩, 紙/116×67.5cm/1931年(ブラハ国立美術館蔵)
151. ブラハ聖ヴィタ大聖堂のステンド・グラスの窓の最終デザイン ペン, 墨, 水彩, 紙/116×67.5cm/1931年/(ブラハ国立美術館蔵)
152. 第1次大戦の退役盲軍人がおくれた感状 水彩, カルトン/35×22.5cm; 文字部分: 35×22.5cm/9×22.5cm/1924年(イージー・ムハ・コレクション)
153. クロチア総督ミコラーシュ・シュビッチ・ズリンスキーによるシゲット防衛 鉛筆, 水彩, 紙/32.5×44.5cm/1914年(イージー・ムハ・コレクション)
154. イヴァンチツェのクラリツェ聖書の印刷 鉛筆, 水彩, 紙/32.5×45.5cm/1914年(イージー・ムハ・コレクション)
155. グリュンヴァルトの戦いが終わって パステル, グレー=ベージュ色の紙/33.5×51cm/1924年(イージー・ムハ・コレクション)
156. ヴイトコフ山の戦いが終わって 黒チョーク, 白のハイライト, 紙/31.5×34cm/1925年(イージー・ムハ・コレクション)
157. フス教徒の王イージー・ズ・ボジエブラディ 木炭, 白のハイライト, 紙/31.5×34cm/1925年(イージー・ムハ・コレクション)
158. ブルガリアのツァー, シメオン 鉛筆, 水彩, 紙/39×44cm/1926年(イージー・ムハ・コレクション)
159. セルビアのツァー, シュチェパーン・ドウジャンの東ローマ帝国皇帝即位 鉛筆, ペン, インク, 水彩, 紙/44×39cm/1926年(イージー・ムハ・コレクション)
160. 王プシエミスル・オタカル2世 鉛筆, 水彩, 白のハイライト, 紙/39×46.4cm/1926年(イージー・ムハ・コレクション)
161. 聖アトス山 木炭, 白のハイライト, カルトン/33.2×37.4cm/1926年(イージー・ムハ・コレクション)
162. スラヴ菩提樹のもとでスラヴの若者たちの誓い 鉛筆, 水彩, 紙/29.7×44.2cm/1926年(イージー・ムハ・コレクション)
163. フルショヴァニー城のための衝立 油彩, カンヴァス/180×161cm/1881-83年(プルノー, モラヴィア美術館蔵)
164. ローマの火災を見つめるネロ 油彩, カンヴァス/70×120.5cm/1887年(フラデツ・クラロヴェー美術館蔵)
165. 瞑想 油彩, カンヴァス/87×138cm/(ドイツ・コレクション)
166. 通称<ウミロフ・ミラー> 油彩, カンヴァス/270×338cm/1903-04年(ドイツ・コレクション)
167. 赤いコート 油彩, カンヴァス/64.8×48.8cm/1902年(イージー・ムハ・コレクション)

168. マルシュカ パステル, 紙/72×50cm/1903年(イージー・ムハ・コレクション)
169. マルシュカ グワッシュ, 合板/53×33cm/1903年(イージー・ムハ・コレクション)
170. 若い女(おそらくスラヴィーコヴァー夫人)の肖像 油彩, カンヴァス/43×34cm/1903年(フラデツ・クラールヴェー美術館蔵)
171. アイリスにかこまれた女 油彩, カンヴァス/79×54cm/1905年(ビルゼン, 西ポヘミア美術館蔵)
172. 薔薇 油彩, カンヴァス/59.5×23cm/1901年(ドイ・コレクション)
173. カーネーション 油彩, カンヴァス/59.5×23cm/1901年(ドイ・コレクション)
174. 裸婦 油彩, カンヴァス/60×40.2cm/1903年(イージー・ムハ・コレクション)
175. 薔薇色の布をまとった裸婦 油彩, カンヴァス/97.5×51cm/1903年(イージー・ムハ・コレクション)
176. スラヴの収穫祭 油彩, カンヴァス/111×160cm/1912年(ホドニン美術館蔵)
177. 少女の像 油彩, カンヴァス/47×46cm/1913年(ビルゼン, 西ポヘミア美術館蔵)
178. ズピロフ城の窓からの眺め 油彩, カンヴァス/39.5×58.8cm/1913年(イージー・ムハ・コレクション)
179. 花にかこまれた女:春 油彩, カンヴァス/60.3×40.5cm/1916年(イージー・ムハ・コレクション)
180. 水差しをもつ少女 油彩, カンヴァス/48×49cm/1917年(ホドニン美術館蔵)
181. リプシエ 油彩, カンヴァス/220×110cm/1917年(イージー・ムハ・コレクション)
182. ミューズ テンペラ, カンヴァス/92×65.5cm/1920年(ゴットワルドフ美術館蔵)
183. スラヴィア テンペラ, カンヴァス/80×76cm/1920年(イージー・ムハ・コレクション)
184. りんごをもつクローチアの女 油彩, カンヴァス/76.4×67cm/1920年(イージー・ムハ・コレクション)
185. 乱れ髪の少女とチューリップ 油彩, カンヴァス/76.8×66.9cm/1920年(イージー・ムハ・コレクション)
186. 菊を頭につけた少女とりんご 油彩, カンヴァス/72×71.8cm/1920年(イージー・ムハ・コレクション)
187. チューリップをもつ少女 油彩, カンヴァス/56.8×54.9cm/1920年(イージー・ムハ・コレクション)
188. 宿命 油彩, カンヴァス/51.5×53.3cm/1920年(イージー・ムハ・コレクション)
189. 息子の肖像 油彩, カンヴァス/72×65cm/1922年(イージー・ムハ・コレクション)
190. 燃えるろうそくと女 油彩, カンヴァス/78×79cm/1923年(イージー・ムハ・コレクション)
191. スケッチブックをもつ半裸の女 油彩, カンヴァス/80.5×61cm/1926年(イージー・ムハ・コレクション)
192. 希望の光 油彩, カンヴァス/96.2×90.7cm/1933年(イージー・ムハ・コレクション)
193. 眠れる大地の春の目覚め 油彩, カンヴァス/135.7×90cm/1933年(イージー・ムハ・コレクション)
194. 白い布をまとった少女 油彩, 合板/50×49.9cm/1935年(イージー・ムハ・コレクション)
195. 小さなサテュロス 油彩, 合板/49.5×50cm/1936年(イージー・ムハ・コレクション)
196. 息子の肖像(楕円形) 鉛筆, ハイライト, 灰緑色紙/34.2×27.7cm/1922年(イージー・ムハ・コレクション)
197. 髪に花をつけた少女 色チョーク, 白のハイライト, 紙/64×54cm/1927年(ホドニン美術館蔵)
198. 花をもつ女 ペン, 色インク, 紙/42.1×29cm/1930年(プラハ国立美術館蔵)
199. 坐る女の習作 色チョーク, 紙/31.5×25cm/1930年頃(プラハ国立美術館蔵)
200. 坐る少女 ペン, 色インク, 紙/34.6×23.5cm/1930年(プラハ国立美術館蔵)
201. 月桂樹の小枝を頭につけた少女の顔 チョーク, 水彩, 白のハイライト, 紙/39.5×28.5cm/1935-36年頃(プラハ国立美術館蔵)
202. 理性の時代 鉛筆, 水彩, グワッシュ, カルトン/30.1×34.8cm/1936-38年(イージー・ムハ・コレクション)
203. 愛の時代 鉛筆, 水彩, カルトン/48.3×31.6cm/1936-39年(イージー・ムハ・コレクション)
204. 英知の時代 鉛筆, 水彩, グワッシュ, カルトン/36×35cm/1936-38年(イージー・ムハ・コレクション)
205. スラヴ民族連帯の誓い(未完) 油彩, カンヴァス/53.6×45.5cm/1939年(イージー・ムハ・コレクション)
206. つた:飾り皿 ブリキにプリント/直径40cm/1902年頃(ドイ・コレクション)
207. 月桂樹:飾り皿 ブリキにプリント/直径40cm/1902年頃(ドイ・コレクション)
208. (参考出品)オーギュスト・ロダン作 地獄に落ちた女たち ブロンズ/1910年作(イージー・ムハ・コレクション)



11



16



23



111



118



筑後の土と自然に生きた画家

### 伊東静尾展

1984年1月6日(金)―2月5日(日)(月曜休館、ただし1月16日(月)開館/28日間)

主催：石橋財団石橋美術館/西日本新聞社/テレビ西日本

出品内容：油彩95点、水彩・素描5点 計100点

入場者総数：4,183人

### 伊東静尾(1902―1971)

1. 水繩山 油彩, 画布/65.2×80.1cm/1928年
2. 高良台風景 油彩, 画布/80.5×99.8cm/1933年
3. 御塚 油彩, 画布/60.8×72.8cm/1934年
4. 和顔愛語 油彩, 画布/80.3×99.8cm/1934年
5. 黄櫨 油彩, 画布/97.6×145.5cm/1935年
6. 収穫 油彩, 画布/73.0×81.3cm/1935年(佐賀県唐津市役所蔵)
7. 春庭 油彩, 画布/112.6×145.5cm/1936年
8. 野火 油彩, 画布/92.5×147.3cm/1937年
9. 静物 油彩, 画布/60.7×72.8cm/1938年
10. 銃後 油彩, 画布/111.8×145.2cm/1938年7月
11. 猿廻し 油彩, 画布/162.0×130.0cm/1939年
12. 鬪鶏 油彩, 画布/44.5×53.0cm/1940年(清力美術館蔵)
13. 静物 油彩, 画布/31.8×41.0cm/1940年
14. 虫追い 油彩, 画布/145.6×112.3cm/1941年
15. バラ 油彩, 画布/73.0×60.7cm/1942年
16. 村童 油彩, 画布/117.1×90.9cm/1947年(清力美術館蔵)
17. トンボ釣り 油彩, 画布/73.3×60.8cm/1947年
18. 案山子 油彩, 画布/73.1×60.8cm/1947年
19. 庭 油彩, 板/85.0×85.0cm/1948年
20. 池表 油彩, 画布/130.2×162.2cm/1949年
21. 納屋 油彩, 画布/161.7×130.6cm/1949年
22. 斉唱 油彩, 画布/114.8×145.8cm/1949年
23. 素朴なる状景 油彩, 画布/162.1×130.6cm/1950年5月
24. 交響 油彩, 画布/161.2×130.5cm/1950年6月
25. マンドリン 油彩, 画布/60.3×50.3cm/1950年
26. ザボン 油彩, 画布/37.8×45.5cm/1951年12月
27. 村内 油彩, 画布/161.8×130.7cm/1952年
28. 馬屋 油彩, 画布/161.2×130.0cm/1952年
29. 春風 油彩, 板/77.4×59.0cm/1953年
30. 筑後川洪水の巻 油彩, 画布/162.0×130.3cm/1953年
31. 草笛 油彩, 画布/162.0×130.5cm/1953年
32. 解放 油彩, 画布/162.5×130.3cm/1953年
33. 作品A(浮立) 油彩, 画布/226.5×181.0cm/1954年
34. 作品B(馬型) 油彩, 画布/227.1×182.0cm/1958年
35. 作品(石のしおり) 油彩, 画布/52.5×64.8cm/1954年
36. 姿 油彩, 画布/121.7×64.2cm/1954年
37. 背振山 油彩, 画布/53.2×65.2cm/1955年
38. 作品(A) 油彩, 画布/136.8×85.2cm/1955年
39. 作品(B) 油彩, 画布/136.7×85.3cm/1955年

11

22

40. 激動 油彩, 画布/225.5×181.7cm/1955年
41. 寂光 油彩, 画布/161.9×130.5cm/1955年
42. 分裂 油彩, 画布/181.7×151.2cm/1956年
43. 漂変 油彩, 画布/47.8×57.2cm/1956年
44. 月光 油彩, 板/75.5×58.2cm/1956年
45. 作品(A) 油彩, 画布/176.0×106.1cm/1956年
46. 作品(B) 油彩, 画布/176.3×105.8cm/1956年
47. 鳥籠 油彩, 画布/45.3×52.8cm/1957年
48. 像 油彩, 画布/53.0×65.5cm/1957年
49. 作品(土) 油彩, 画布/90.5×67.7cm/1958年
50. 土(A) 油彩, 画布/181.7×151.0cm/1958年
51. 土(C) 油彩, 画布/175.5×133.6cm/1958年
52. 土(1) 油彩, 画布/175.6×132.5cm/1959年
53. 土(2) 油彩, 板/176.4×132.0cm/1959年
54. 土(3) 油彩, 画布/176.0×132.8cm/1959年
55. 道 油彩, 紙/105.7×90.7cm/1960年
56. 地痕 油彩, 板/90.5×75.5cm/1960年
57. 道1(溜) 油彩, 板/136.3×163.0cm/1960年
58. 道2(溜) 油彩, 板/136.0×181.5cm/1960年
59. 道3(溜) 油彩, 画布/162.0×132.0cm/1960年
60. 土(A) 油彩, 板/181.8×136.5cm/1961年
61. 土(B) 油彩, 板/181.3×135.7cm/1961年
62. 土 油彩, 板/90.5×75.5cm/1961年
63. 土 油彩, 板/112.3×145.5cm/1962年
64. 土(朱) 油彩, 画布/110.5×145.0cm/1963年
65. 土(朱) 油彩, 板/110.3×144.3cm/1963年
66. 土 油彩, 画布/64.8×80.3cm/1964年
67. 泥(A) 油彩, 板/112.5×145.8cm/1964年
68. 泥(B) 油彩, 画布/111.2×145.5cm/1964年
69. 道(黄) 油彩, 板/162.0×112.7cm/1965年
70. 耕作 油彩, 板/45.3×37.9cm/1965年
71. 柿 油彩, 板/24.3×33.4cm/1965年
72. 土(溜) 油彩, 画布/90.8×116.3cm/1965年
73. 山湖の朝霧 油彩, 画布/50.0×60.6cm/1966年
74. 土 油彩, 画布/162.2×130.2cm/1966年
75. 土 油彩, 画布/161.7×130.2cm/1966年
76. 出土 油彩, 画布/116.5×91.5cm/1967年
77. 土と共々 油彩, 画布/117.0×90.8cm/1967年
78. 農家 油彩, 画布/53.0×45.7cm/1967年
79. 妙義山 油彩, 画布/41.0×31.8cm/1967年
80. 寒椿 油彩, 画布/60.4×49.8cm/1967年
81. 石絞(1) 油彩, 画布/161.8×130.7cm/1968年
82. 石絞(2) 油彩, 画布/161.4×130.2cm/1968年
83. 晚秋 油彩, 画布/45.3×37.8cm/1968年
84. 納屋 油彩, 画布/38.0×45.5cm/1968年10月
85. 馬子 油彩, 画布/72.8×60.6cm/1968年
86. 溜 油彩, 画布/90.0×115.5cm/1969年
87. ハニワの塔(A) 油彩, 画布/162.2×130.5cm/1969年

31

58

86

- 
88. ハニワの塔(B) 油彩, 画布/162.0×130.4cm/1969年
  89. 土と太陽 油彩, 画布/60.4×72.5cm/1969年
  90. 作品(土) 油彩, 板/91.5×60.7cm/1969年
  91. 投影 油彩, 画布/72.5×60.5cm/1969年
  92. 農具 油彩, 画布/72.5×90.8cm/1970年
  93. 馬屋 油彩, 板/160.4×130.3cm/1970年
  94. 納屋 油彩, 画布/130.0×161.7cm/1970年
  95. 石絞 油彩, 画布/116.8×90.8cm/1971年
  96. 山 水彩, 紙/26.9×18.6cm/1965年
  97. 樹 水彩, 紙/26.9×18.2cm/1966年
  98. 杉山 水彩, 紙/27.3×24.3cm/1968年
  99. 唐箕 墨, 紙/19.0×23.3cm/1969年
  100. 樹 墨, 紙/14.1×13.4cm/1970年

※なお本展終了後、伊東ツジ氏より作品の寄贈があった。寄贈を受けた美術館及び作品は次の通りである。( )内は展覧会出品番号。

石橋美術館(32, 55, 60, 62, 77)

北九州市立美術館(53, 58, 61)

福岡県文化会館(30, 68, 86)

福岡市美術館(38, 42, 52)

佐賀県立美術館(31, 33, 36)

## 《特別展示》

---

### 世紀末美術と日本趣味

——19世紀末のヨーロッパ版画より——

1983年4月7日(木)ー6月26日(日)(月曜休館/70日間 常設展示に併設)

出品内容：西洋版画79点

出品作品はアクシスギャラリーにて開催された「世紀末美術と日本趣味」(1982年9月1日ー9月12日)と同じである。詳細は『館報31』(pp. 13-16)を参照のこと。

---

---

## 《地方展》

特別展《アルフォンス・ミュシャ展》開催を機に当館所蔵作品の地方巡回展を行なった。

---

明治・大正・昭和のロマンを描く

石橋財団 久留米・石橋美術館コレクション

### 近代日本の洋画名作展

1983年7月29日(金)―8月16日(火)(水曜休館/17日間)

会場：長野県信濃美術館

主催：信濃毎日新聞社/長野県教育委員会/長野県信濃美術館

後援：長野市教育委員会/信越放送/長野放送/テレビ信州/NHK長野放送局

出品内容：日本近代洋画 126点

入場者総数：10,138人

---

石橋財団 石橋美術館所蔵

### 近代日本洋画の名作展

1983年8月20日(土)―9月11日(日)(月曜休館/20日間)

会場：呉市立美術館

主催：呉市立美術館/呉市文化振興財団/中国新聞社

後援：NHK広島放送局/中国放送/広島テレビ放送/広島ホームテレビ/テレビ新広島/広島エフエム放送

出品内容：日本近代洋画 127点

入場者総数：9,190人

---

### 中丸精十郎(1841―1895)

1. 瀑 油彩、画布/107.6×70.2cm/1890年

### 百武兼行(1842―1884)

2. 臥裸婦 油彩、画布/97.3×188.0cm/1881年頃

### 浅井 忠(1856―1907)

- \*3. グレーの橋 水彩、紙/27.0×43.0cm/1902年

### 黒田清輝(1866―1924)

4. 針仕事 油彩、画布/81.2×65.0cm/1890年
5. 鉄砲百合 油彩、画布/60.3×80.0cm/1909年

### 藤島武二(1867―1943)

6. 天平の面影 油彩、画布/197.5×94.0cm/1902年
  7. 自画像 油彩、画布/47.0×32.5cm/1903年
  8. ヴェルサイユ風景 油彩、画布/73.0×91.0cm/1906-07年
  9. ネミ湖 油彩、板/26.5×35.0cm/1908年
  10. 池畔の女 油彩、板/30.0×31.0cm/1908-09年
  11. 噴水のある池 油彩、画布/24.0×33.0cm/1908-09年
  12. ヴィラ・デステの池 油彩、画布/24.0×33.0cm/1908-09年
  13. 糸杉 油彩、画布/33.0×24.0cm/1908-09年
  14. 池 油彩、画布/31.0×26.0cm/1908-09年
  15. 唐様三部作 グワッシュ、紙/79.0×138.5cm/1912年頃
  16. 五剣山の日の出 油彩、画布/53.0×73.5cm/1932年
  17. 奈良風景 油彩、画布/54.0×46.0cm/1934年
  18. 琉球の女 パステル、紙/36.0×29.0cm/1936年
  19. 蒙古の日の出 油彩、画布/42.0×55.0cm/1937年
-

岡田三郎助(1869—1939)

20. 薔薇の少女 油彩, 画布/119.0×79.0cm/1901年
21. 臥裸婦 油彩, 画布/45.0×91.5cm/1901年
22. 髪梳く女 油彩, 画布/60.0×46.0cm/1915年
23. 水浴の前 油彩, 画布/197.0×76.2cm/1916年

白瀧幾之助(1873—1960)

24. 炉端 油彩, 板/46.0×38.0cm/制作年未詳

中沢弘光(1874—1936)

25. 思い出(下図) 油彩, 画布/69.4×35.0cm/1909年

満谷国四郎(1874—1936)

26. 坐婦 油彩, 画布/65.0×54.5cm/1913年
27. プルターニユ風景 油彩, 画布/46.0×55.5cm/1913年頃
28. 裸婦 油彩, 画布/72.5×60.3cm/1925年
29. 裸婦 油彩, 画布/53.0×45.5cm/1925年

和田英作(1874—1959)

30. 読書 油彩, 画布/73.0×53.5cm/1902年
31. チューリップ 油彩, 画布/80.3×65.0cm/1927年
32. 早春(富士) 油彩, 画布/53.0×65.0cm/1939年

石川寅治(1875—1964)

33. 農事忙 油彩, 画布/91.0×117.0cm/1947年

吉田 博(1876—1950)

34. 上高地 油彩, 画布/45.0×60.5cm/1927-28年頃
35. ウダイプールの宮殿 油彩, 画布/33.0×45.0cm/1931年
36. 奔流 油彩, 画布/97.0×130.0cm/1936年
37. レニヤ山 木版/36.0×50.8cm/1925年
38. 帆船夜 木版/50.5×36.0cm/1925年
39. 外国風景(ルガノ) 木版/25.0×37.0cm/1925年
40. マッターホルン 木版/50.5×36.0cm/1925年

山下新太郎(1881—1966)

- \*41. 読書 油彩, 画布/92.0×73.0cm/1908年

小杉未醒(放庵)(1881—1964)

42. 山幸彦 油彩, 画布/192.0×295.0cm/1917年

青木 繁(1882—1911)

43. 秋の夜 鉛筆, 紙/14.5×16.0cm/1902年
44. 自画像 色鉛筆, 紙/16.5×11.0cm/1903年
45. 自画像 油彩, 画布/81.0×60.5cm/1903年
46. 闍威弥尼 水彩, 板/15.0×10.2cm/1903年
47. 輪転 油彩, 画布/27.3×37.6cm/1903年
- \*48. 天平時代 油彩, 画布/46.0×76.5cm/1904年
49. 春 水彩, 紙/16.3×32.3cm/1904年
50. 丘に立つ三人 水彩, 紙/16.0×14.0cm/1904年
51. 海 油彩, 板/10.3×15.0cm/1904年
52. 農家 油彩, 板/23.6×33.0cm/1904年
53. 木立(森の暮色) 油彩, 板/33.0×24.0cm/1904年
54. 女の顔 油彩, 板(羽子板)/33.0×9.5cm/1904年
55. 風景 水彩, 絹(扇面)/15.0×40.5cm/1904年
56. 海景(布良の海) 油彩, 画布/35.0×71.5cm/1904年
57. 海の幸 油彩, 画布/70.2×182.0cm/1904年

58. 水浴 水彩, 紙/14.0×25.0cm/1904-05年
59. 光明皇后 油彩, 画布/38.0×72.5cm/1905年
60. 大穴年知命 油彩, 画布/75.0×127.0cm/1905年
61. 雪景 油彩, 板/23.3×32.8cm/1906年
62. わだつみのいろこの宮 油彩, 画布/181.5×70.0cm/1907年
63. 月下滞船図 油彩, 画布/41.5×57.0cm/1908年
64. 春 水彩, 襖布/直径44.5cm/1908年
65. 秋 水彩, 襖布/直径44.5cm/1908年

**坂本繁二郎(1882—1969)**

66. 魚を持って来た海女 油彩, 画布/115.7×89.0cm/1913年
67. 静物 油彩, 画布/45.0×60.5cm/1918年
68. 牛 油彩, 画布/71.0×116.5cm/1920年
69. 少女 油彩, 画布/41.0×33.0cm/1923年
70. 読書の女 油彩, 画布/41.0×32.0cm/1923年
71. パリ郊外 油彩, 画布/53.5×65.5cm/1923年
72. 帽子を持てる女 油彩, 画布/80.5×65.0cm/1923年
73. 自画鏡像 油彩, 紙/45.5×37.5cm/1929年
74. 自像 油彩, 画布/52.8×45.2cm/1923-30年
75. 放牧三馬 油彩, 画布/79.5×99.0cm/1932年
76. 柿 油彩, 画布/46.0×55.0cm/1944年
77. 林檎・蜜柑・柿 油彩, 画布/33.0×41.0cm/1958年
78. 阿蘇五景 扉絵 木版/13.0×14.9cm/1948年
79. 阿蘇五景 表紙絵 木版/12.5×14.5cm/1948年
80. 阿蘇五景 噴火口 木版/25.2×36.0cm/1948年
81. 阿蘇五景 根子嶽の朝 木版/25.4×36.2cm/1948年
82. 阿蘇五景 放牧 木版/25.3×36.0cm/1948年
83. 阿蘇五景 波野の月 木版/25.3×36.1cm/1948年
84. 阿蘇五景 南郷谷 木版/25.0×36.0cm/1948年

**石井柏亭(1882—1958)**

85. ソレント 油彩, 画布/45.7×55.0cm/1923年

**和田三造(1883—1967)**

86. 海 油彩, 画布/106.0×197.0cm/制作年未詳
87. 風景(教会の見える) \*油彩, 画布/31.9×41.0cm/制作年未詳

**金山平三(1883—1964)**

88. 田沢の春 油彩, 画布/45.0×45.0cm/制作年未詳
89. 石母田の堤 油彩, 画布/40.9×53.0cm/制作年未詳

**辻 永(1884—1974)**

90. ハルピンの冬 油彩, 画布/33.3×45.5cm/1917年
91. 上高地 油彩, 画布/40.9×53.0cm/1940年

**斎藤与里(1885—1959)**

92. 秋景 油彩, 板/21.0×27.3cm/制作年未詳

**青山熊治(1886—1932)**

93. 男の像 油彩, 画布/90.6×60.5cm/1921年

**藤田嗣治(1886—1968)**

- \* 94. 横たわる女と猫 油彩, 画布/65.0×100.0cm/1932年
95. 室内 油彩, 画布/38.0×46.0cm/1943年頃
96. 人形を抱く子供 墨, 紙/44.0×53.0cm/1948年
97. 猫 銅版/36.0×38.5cm/制作年未詳

小出楯重(1887—1931)

- 98. 裸婦 油彩, 画布/70.0×46.5cm/1925年
- 99. 裸婦素描 木炭, 紙/50.0×35.0cm/1926年

遠山五郎(1888—1928)

- 100. 婦人読書図 油彩, 画布/80.9×64.7cm/1922年

安井曾太郎(1888—1955)

- 101. 水浴裸婦 油彩, 画布/128.0×193.0cm/1914年
- 102. 玉蟲先生像 油彩, 画布/46.0×42.0cm/1934年
- 103. レモンとメロン 油彩, 画布/45.5×37.9cm/1955年

梅原龍三郎(1888— )

- \*104. ナポリよりソレントを望む 油彩, 画布/45.5×61.0cm/1921年

片多徳郎(1889—1934)

- 105. 芙蓉 油彩, 画布/45.5×37.8cm/1924年

岸田劉生(1891—1929)

- \*106. 南瓜を持てる女 油彩, 画布/80.0×575.5cm/1914年

長谷川利行(1891—1940)

- 107. 動物園風景 油彩, 画布/45.0×53.0cm/制作年未詳
- 108. 裸婦 油彩, 画布/45.5×53.0cm/1938年

須田国太郎(1891—1961)

- 109. 構原風景 油彩, 画布/65.2×80.0cm/1955年

児島善三郎(1893—1962)

- 110. トレド風景 油彩, 画布/50.0×100.0cm/1925-28年
- 111. 風景 水彩, 紙/39.0×59.0cm/1951年
- 112. 海芋ときりん草 油彩, 画布/92.0×73.0cm/1954年

林 倭衛(1895—1945)

- 113. サント・ヴィクトワール 油彩, 画布/31.6×41.0cm/制作年未詳
- 114. フランス風景 油彩, 画布/44.6×53.7cm/1924-25年

古賀春江(1895—1933)

- 115. 地藏尊 水彩, 紙/51.2×35.0cm/1919年
- 116. 海水浴の女達 油彩, 画布/91.0×116.8cm/1923年
- 117. 海女 油彩, 画布/116.8×91.0cm/1923年
- 118. 誕生 油彩, 画布/91.0×116.8cm/1924年
- 119. 鳥籠 油彩, 画布/111.0×145.5cm/1929年
- 120. 素朴な月夜 油彩, 画布/116.8×91.0cm/1929年
- 121. 単純なる哀話 油彩, 画布/116.8×91.0cm/1930年
- 122. 厳しき伝統 油彩, 画布/111.0×145.5cm/1931年
- 123. 感傷の静脈 油彩, 画布/116.8×91.0cm/1931年
- 124. 少女 油彩, 画布/116.8×91.0cm/1932年
- 125. 静物 水彩, 紙/40.0×52.0cm/制作年未詳

佐伯祐三(1898—1928)

- 126. コルドヌリ 油彩, 画布/72.5×59.0cm/1925年
- 127. 休息(鉄道工夫) 油彩, 画布/59.4×71.3cm/1927年頃

\*印の作品はブリヂストン美術館所蔵作品

No. 57《海の幸》は呉会場の9月2日から11日まで展示され、長野会場では展示されなかった

---

《美術館講座》

1983年 8月20日

「アール・ヌーヴォーとアルフォンス・ミュシャ」

講師：島田紀夫氏

1984年 1月21日

「父—伊東静尾」

講師：古賀耕児氏

「伊東静尾の作品とその様式」

講師：田内正宏

1984年 2月25日

「日本の近代洋画を考える立場」

講師：増田 洋氏



# 1983年度入場者数

## ブリヂストン美術館

月	開館 日数	有料					無料	総計	一日平均
		一般	大・高生	中・小生	団体	合計			
4	23	3,609	901	354	372	5,236	534	5,770	251
5	25	19,332	5,129	899	998	26,358	13,194	39,552	1,582
6	25	3,506	840	119	1,099	5,564	56	5,620	225
7	27	3,850	1,075	538	615	6,078	89	6,167	228
8	26	4,956	1,707	1,775	308	8,746	89	8,835	246
9	21	6,441	1,416	299	182	8,338	2,160	10,498	500
10	23	10,323	2,640	418	301	13,682	8,937	22,619	983
11	26	3,615	815	91	782	5,303	55	5,358	206
12	22	2,360	484	67	260	3,171	47	3,218	146
1	23	2,722	579	169	436	3,906	40	3,946	171
2	25	3,678	877	349	405	5,309	38	5,347	214
3	27	4,061	914	306	315	5,596	53	5,649	209
合計	293	68,453	17,377	5,384	6,073	97,287	25,292	122,579	418

## 石橋美術館

月	開館 日数	有料					無料	総計	一日平均
		一般	大・高生	中・小生	団体	合計			
4	21	1,321	110	80	440	1,951	59	2,010	96
5	26	2,667	156	249	2,506	5,578	142	5,720	220
6	23	1,429	83	76	937	2,525	26	2,551	111
7	23	1,842	175	140	1,163	3,320	232	3,552	154
8	24	6,525	1,844	894	3,368	12,631	3,848	16,479	687
9	7	445	19	39	159	662	14	676	97
10	27	2,004	76	149	4,997	7,226	178	7,404	274
11	26	1,966	318	142	3,565	5,991	178	6,169	237
12	19	765	32	35	344	1,176	38	1,214	64
1	23	1,389	90	169	287	1,935	924	2,859	124
2	21	1,625	132	155	459	2,371	683	3,054	145
3	27	1,816	275	245	536	2,872	68	2,940	109
合計	267	23,794	3,310	2,373	18,761	48,238	6,390	54,628	205

## 新収蔵作品 New Acquisitions

### 井上三綱

#### INOUE, Sanko

1899—1981

文献 Bibl.: 『画集 井上三綱』美術出版社, 1959, no. 67; 『井上三綱画集・時間について』東美デザイン, 1978, no. 24

保管: 石橋美術館

Managed by Ishibashi Museum of Art

#### 1

##### 編み物

1951年

油彩(?)・紙, 63.2×46.9cm

右下に印章: 「三綱」(朱文長方印); 裏板に署名: *Sanko*

##### Person Nitting

1951

Oil(?) on paper, 63.2×46.9cm

Stamped lower right; signed on back board: *Sanko*

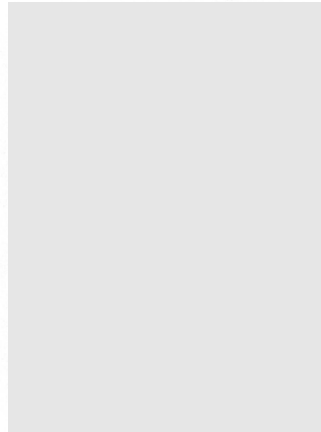
来歴 Prov.: 井上正子氏寄贈(Donated by Mrs Inoue)

展覧会歴 Exh.: 「奔放な画境に託した東洋のこころ・井上三綱遺作展」福岡市美術館, 1983, no. 17

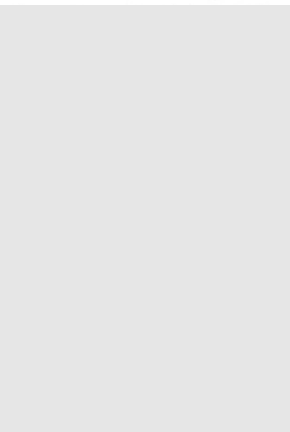
文献 Bibl.: 『井上三綱画集・時間について』東美デザイン, 1978, no. 20

保管: 石橋美術館

Managed by Ishibashi Museum of Art



2



1

#### 2

##### ドン・キホーテ

1954年

油彩(?)・紙, 54.0×38.0cm

左下に印章: 「井上三綱」(白文方印); 裏面に鉛筆による書き込み: 馬を御す

##### Don Quixote

1954

Oil(?) on paper, 54.0×38.0cm

Stamped lower left; inscribed in pencil on reverse

来歴 Prov.: 井上正子氏寄贈(Donated by Mrs Inoue)

展覧会歴 Exh.: 「奔放な画境に託した東洋のこころ・井上三綱遺作展」福岡市美術館, 1983, no. 22

#### 3

##### 裸婦群像

1955年

油彩(他)・紙, 78.2×40.3cm

右下に年記・署名: 1955 *Sanko*; 裏板に題名・年記・署名: 裸婦群像 1955 井上三綱画

##### Nude Women

1955

Oil, etc. on paper, 78.2×40.3cm

Dated and signed lower right: 1955 *Sanko*; entitled, dated and signed on back board

来歴 Prov.: 井上正子氏寄贈(Donated by Mrs Inoue)

展覧会歴 Exh.: 「ヨーロッパ巡回日本現代絵画展国内展示会」日本橋・高島屋, 1958; 「ヨーロッパ巡回日本現代絵画展」イタリア, ドイツ, フランス, ユーゴスラヴィア, エジプト, イラン, 1958; 「奔放な画境に託した東洋のこころ・井上三綱遺作展」福岡市美術館, 1983, no. 27

文献 Bibl.: 『画集 井上三綱』美術出版社, 1959, no. 63

保管: 石橋美術館

Managed by Ishibashi Museum of Art

#### 4

##### 相

1960年

油彩(他)・紙, 39.7×15.5cm(最大)

左下に署名・印章: *Sanko* 「三綱」(朱文長方印)

##### Form

1960

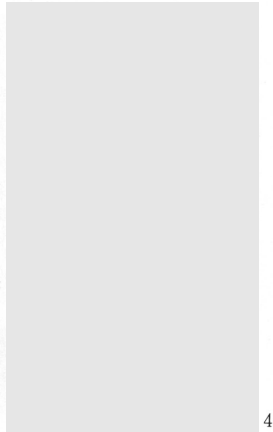
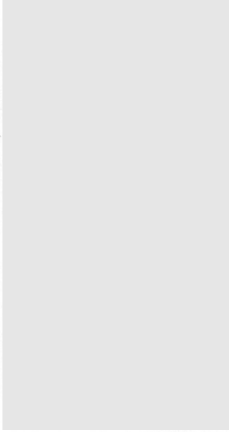
Oil, etc. on paper, 39.7×15.5cm(maximum)

Signed and stamped lower left

来歴 Prov.: 井上正子氏寄贈(Donated by Mrs Inoue)

展覧会歴 Exh.: 「奔放な画境に託した東洋の ころろ・井上三綱遺作展」福岡市美術館, 1983, no. 51  
文献 Bibl.: 『井上三綱画集・時間について』東美デザイン, 1978, no. 51

保管: 石橋美術館  
Managed by Ishibashi Museum of Art



5

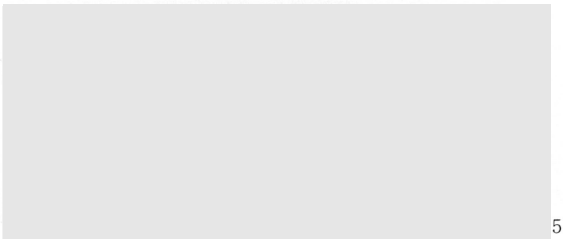
### 殷殷と鐘がなる

1974年  
油彩(?)・墨・コラージュ・紙(六曲一隻屏風), 102.6×38.2; 102.6×42.4; 102.6×42.3; 102.6×42.4; 102.6×42.2; 102.6×37.9cm(左から右)  
右下に署名: Sanko

### Men Sounding a Gong

1974  
Oil(?), sumi, and collage on paper (six-fold screen), 102.6×38.2; 102.6×42.4; 102.6×42.3; 102.6×42.4; 102.6×42.2; 102.6×37.9cm(left to right)  
Signed lower right: Sanko  
来歴 Prov.: 井上正子氏寄贈(Donated by Mrs Inoue)  
展覧会歴 Exh.: 「奔放な画境に託した東洋のころろ・井上三綱遺作展」福岡市美術館, 1983, no. 92  
文献 Bibl.: 『井上三綱画集・時間について』東美デザイン, 1978, no. 13

保管: 石橋美術館  
Managed by Ishibashi Museum of Art



6

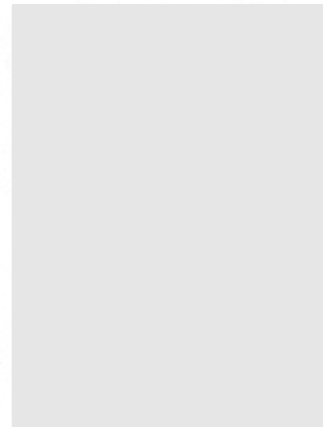
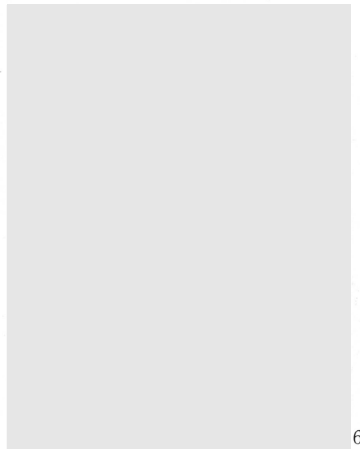
### 桃李美人図

墨(他不詳)・紙, 41.1×31.6cm  
右下に署名・印章: 三綱画「三綱」(朱文長方印); 右上に印章(朱文長方印, 印文未詳)

### Beautiful Woman

Sumi, etc. on paper, 41.1×31.6cm  
Signed and stamped lower right; stamped upper right  
来歴 Prov.: 井上正子氏寄贈(Donated by Mrs Inoue)  
展覧会歴 Exh.: 「奔放な画境に託した東洋のころろ・井上三綱遺作展」福岡市美術館, 1983, no. 82

保管: 石橋美術館  
Managed by Ishibashi Museum of Art



7

### 桃李美人図(対幅)

墨(他不詳)・紙, 左: 114.8×40.4cm; 右: 114.9×40.5cm  
左幅右幅とも左下と右下に印章: 「三綱」(朱文長方印)

### Beautiful Woman(a pair)

Sumi, etc. on paper, left part : 114.8×40.4cm ; right part : 114.9×40.5cm

Stamped lower left(left part)and lower right (right part)

来歴 Prov. : 井上正子氏寄贈(Donated by Mrs Inoue)

保管 : 石橋美術館

Managed by Ishibashi Museum of Art

註 : 井上三綱は独特のマチエールを作り出すために、油彩、グワッシュ、墨などを併用し、フロッタージュ、コラージュ、スクラッチなどの技法も用いており、材質及び技法は現時点では詳らかにし得なかった。そこで、(?)あるいは(他)という表記を用いた。

### 伊東静尾

#### ITO, Shizuo

1902—1971

#### 8

##### 解放

1953年

油彩・画布, 162.5×130.3cm

左下に年記・署名 : 1953. ITO. SHIZUWO

##### Release

1953

Oil on canvas, 162.5×130.3cm

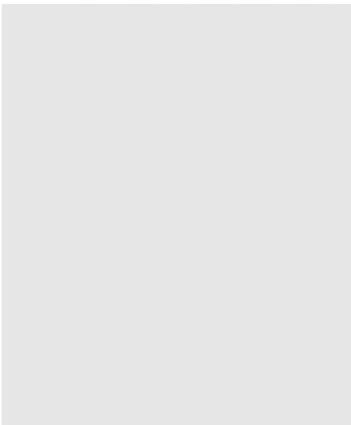
Dated and signed lower left : 1953. ITO. SHIZUWO

来歴 Prov. : 伊東ツジ氏寄贈(Donated by Mrs Ito)

展覧会歴 Exh. : 「第38回二科展」東京都美術館, 1953 ; 「第38回二科福岡展」福岡・岩田屋, 1954 ; 「第2回江南美術展」久留米・旭屋デパート, 1954 ; 「筑後の土と自然に生きた画家・伊東静尾展」石橋美術館, 1984, no. 32

保管 : 石橋美術館

Managed by Ishibashi Museum of Art



8

#### 9

##### 道

1960年

油彩・紙, 105.7×90.7cm

左下に署名 : SHIZUWO. ITO

##### Road

1960

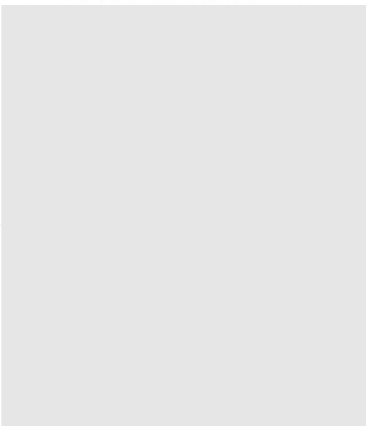
Oil on paper, 105.7×90.7cm

Signed lower left : SHIZUWO. ITO

来歴 Pfov. : 杉本竹次郎氏寄贈(Donated by Mr. Sugimoto)  
展覧会歴 Exh. : 「サロン・ド・コンパレゾン」パリ国立近代美術館, 1960 (Salon de Comparaison, Musée National d'Art Moderne, Paris, 1960) ; 「第9回江南美術展」石橋美術館, 1960 ; 「第10回二科西人社展」石橋美術館, 1960 ; 「第13回全九州沖繩二科西人社展」久留米・井筒展, 1971 ; 「筑後の土と自然に生きた画家・伊東静尾展」石橋美術館, 1984, no. 55

保管 : 石橋美術館

Managed by Ishibashi Museum of Art



9

#### 10

##### 土(A)

1961年

油彩・板, 181.8×136.5cm

右下に年記・署名 : 1961. SHIZUWO. ITO

##### Soil(A)

1961

Oil on panel, 181.8×136.5cm

Dated and signed lower right : 1961. SHIZUWO. ITO

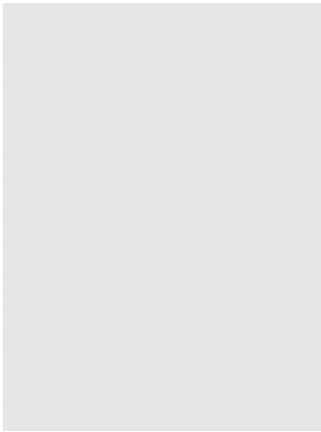
来歴 Prov. : 伊東ツジ氏寄贈(Donated by Mrs Ito)

展覧会歴 Exh. : 「第46回二科展」東京都美術館, 1961 ; 「第46回二科福岡展」福岡・岩田屋, 1962 ; 「筑後の土と自然に生きた画家・伊東静尾展」石橋美術館, 1984, no. 60

文献 Bibl. : 『46 二科画集』1961

保管 : 石橋美術館

Managed by Ishibashi Museum of Art



10

11

土

1961年

油彩・板, 90.5×75.5cm

左下貼紙に署名: *SHIZUWO. ITO*

Soil

1961

Oil on panel, 90.5×75.5cm

Signed lower left(on a patch of paper): *SHIZUWO. ITO*

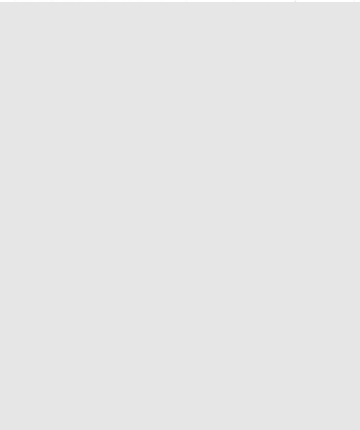
来歴 Prov.: 伊東ツジ氏寄贈(Donated by Mrs Ito)

展覧会歴 Exh.:「二科メキシコ展」オーデトリオ・ナショナル,

1961:「筑後の土と自然に生きた画家・伊東静尾展」石橋美術館,  
1984, no. 62

保管: 石橋美術館

Managed by Ishibashi Museum of Art



11

12

土と共々

1967年

油彩・画布, 117.0×90.8cm

左下に署名: *SHIZUWO. ITO*

Soil and Excavations

1967

Oil on canvas, 117.0×90.8cm

Signed lower left: *SHIZUWO. ITO*

来歴 Prov.: 伊東ツジ氏寄贈(Donated by Mrs Ito)

展覧会歴 Exh.:「第52回二科展」東京都美術館, 1967;「第52回

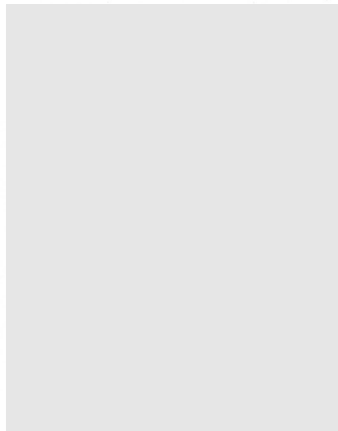
二科福岡展」福岡県文化会館, 1968;「筑後の土と自然に生きた画

家・伊東静尾展」石橋美術館, 1984, no. 77

文献 Bibl.:『52 二科画集』1967

保管: 石橋美術館

Managed by Ishibashi Museum of Art



12

蓮見智幸

HASUMI, Tomoyuki

1955—

13

SC-8321

1983年

木版, 103.5×73.5cm

右下に署名・年記: *Tomoyuki Hasumi '83*; 左下に番号・題名:  
*AP SC-8321*

SC-8321

1983

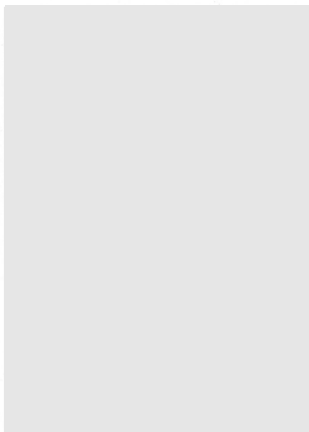
Woodcut, 103.5×73.5cm

Signed and dated lower right: *Tomoyuki Hasumi '83*;  
numbered and entitled lower left: *AP SC-8321*展覧会歴 Exh.:「第16回現代日本美術展」東京都美術館, 京都市美術館, 1983, プリヂェストン美術館賞受賞 (*The 16th Contemporary Art Exhibition of Japan*, Tokyo Metropolitan

---

Art Museum and Kyoto Municipal Art Museum, 1983,  
awarded the Bridgestone Museum of Art Prize)

保管：ブリヂストン美術館  
*Managed by Bridgestone Museum of Art*



13

マン・レイ

---

**MAN RAY**

1890—1976

14

パブロ・ピカソ

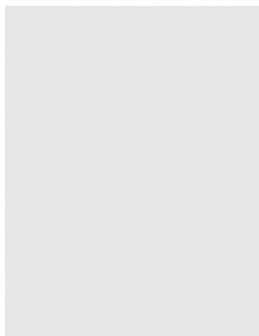
写真, 1981年ピエール・ガスマンによるプリント

**Pablo Picasso**

Photograph. Printed by Pierre Gassmann, 1981.

来歴 Prov.: 東京, ツアイト・フォト寄贈(Donated by Zeit  
Photo, Tokyo)

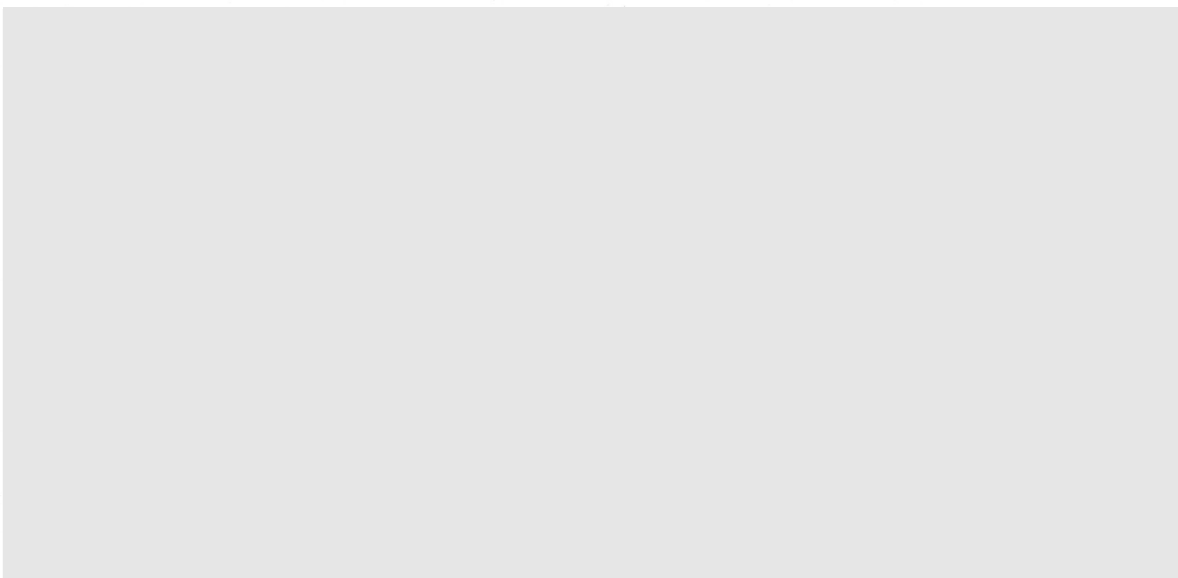
保管：ブリヂストン美術館  
*Managed by Bridgestone Museum of Art*



14

---

## 修復記録





## 研究報告

藤島武二《天平の面影》《諧音》そして《蝶》を表  
象された雅楽と西洋音楽 (その2)

中田裕子

1903年(明治36年)7月23日の夜、東京音楽学校奏楽堂において日本人により初めてオペラが上演された。それは、「近代歌劇改善なる」<sup>1)</sup> クリストフ・W. R. フォン・グリュック作曲〈歌劇オルフォイス〉(〈オルフェオとエウリディーチェ〉)の3幕全曲上演であった。これが東京音楽学校主催の音楽会であったなら、アウグスト・ユンケル指揮、東京音楽学校管弦楽団の伴奏で上演されたであろうが、特別許可を受けた夏休み期間中の有志(歌劇研究会)によるものであったので、ノエル・ベリー指導・指揮、ラファエル・フォン・ケーベルのピアノ伴奏<sup>2)</sup>によって上演された。キャストは

オルフォイス:吉川やま(アルト)

オイリディーチェ(百合姫):柴田環(ソプラノ)

アモール:宮脇せん(ソプラノ)

であり、コーラスの中には、のちに教育界で活躍する鈴木乃婦、東京音楽学校初代校長伊澤修二の娘、伊澤乙女等がいた。

この〈オルフォイス〉はライブツィヒ・ペーターズ版のフランス語歌詞からの翻訳台本(日本語歌詞)により上演され、その翻訳を担当したのが、のちに〈流浪の民〉の訳詞で知られる石倉小三郎、乙骨三郎、吉田豊吉(白甲)、そしてのちに、〈ローレライ〉〈菩提樹〉を訳詞する近藤逸五郎(朔風)であり、彼らは、上田敏(乙骨三郎は上田の従兄)、山岸光宣のアドヴァイスを受けた。〈オルフォイス〉上演は、当時音楽好きな東京帝国大学や東京外国語学校の学生であった彼らの後日に、大きな影響を与えることになる。彼らは、音楽的な制約や言語体系上の制約により、彼らにとって初めての経験であったかと思われるその翻訳に、相当苦労したようである<sup>3)</sup>。

この〈オルフォイス〉の舞台装置をデザインしたのが山本芳翠であり、書割や道具立を実際に製作したのが、山本、藤島武二、岡田三郎助、北蓮蔵、湯浅一郎、白瀧幾之助、そして、磯谷額縁店の長尾健吉であった。フットライトがないので電球を買って来て、いちいちカバーをかけた床にずらっと並べた等、こちらの方も相当苦労があったようである。

ところで、官命留学により、日本人で初めて本格的な

音楽教育(アメリカで1年、ウィーンで5年)を受け、当時天才の名をほしいままにしていた幸田延(露伴の妹)による、ケーベルのピアノ評は下記のようなものである。「ケ博士の演奏はピアノの音は細めの美しいもので、例えば細い線がきの絵の様な感じがする。」<sup>4)</sup> それは音楽家の象徴としてのオルフェウスのつまびく立琴の音を十分に表現していたものであったろう。

東京音楽学校二年在学中であり、百合姫を唱った柴田、のちの三浦環(当時20歳)は、下記のように回想している。「当時、上野の音楽学校は二頭立ての馬車や人力車で大変な賑はひでした。東京の所謂、内外貴顕紳士淑女で会場は一杯のお客様でした。私達は一生懸命うたひました。」<sup>5)</sup> また、「歌劇オルフォイスを観る」(『帝国文学』1903年9月)に、「当夜の聴衆無慮数百に達し、首都文芸の各社会には遺憾なく代表せられしに似たり」とある。20数年後、パリのオペラ・コミックで見た「〈オルフェー〉は、上野の音楽学校で見たのと比べて、何んだかあっさりしている」と、長尾一平(健吉の息子)が語っている<sup>6)</sup>。また、同じ『帝国文学』に、「短時間の準備を思へば幾多の欠点は之を看過するに当すべし」とあるが、良くも悪くも、〈オルフォイス〉は、日本において初めて日本人によりオペラを上演するというので、若い熱情の籠ったものであったろう。(東京音楽学校における演奏会は無料であった。)その聴衆の中に、東京美術学校在学中の無名の学生であり、音楽をこよなく愛していた青木繁が、その舞台を熱い目差して見詰めていたと考えてみてはいけないうらうか。

青木繁は、この年秋の白馬会第8回展に、オルフェウス伝説と同じ内容の《黄泉比良坂》(fig. 1)等を出品して、第1回白馬会大賞を得、華麗なデビューを飾っている。青木は日本神話については下記のように述べている。「日本のは創造説よりも開闢説で、哲理的と云ふよりはお話です。カムイザナギ、カムイザナミの性格は実に大和民族の男女を現はして面白いです。黄泉津国の条下や、八尋殿に天の御柱をめぐって美斗乃麻具波比せられたるあたりの崇高な、偉大な、森厳な、霊美な、純潔な所に到ると実に人生の莊重を深く感じて敬虔な念に打たれるのです。」<sup>7)</sup> この世と黄泉津国の境、黄泉比良坂。死者となった妻伊邪那美に追われ、その黄泉比良坂を逃げ戻る伊邪那岐が坂本、つまりこの世の光明の中に迎り着いたその瞬間を、青木は描いたものであろう。それ故に、冥界の空間の上に現世の空間が配置されている。人が異空間を探るという物語性にもよるが、この《黄泉比良坂》には空間の二元性が見られる。画面右下部より上へと、伊邪那岐を追う黄泉醜女等をうねらせ、そのうねりは右上部にあるこの世の光の中へ逃る伊邪那岐の背に至るが、そ



れは、黄泉の藍碧の虚空に浮遊する伊邪那美の悲りを表現したものであったろうか。

残酷さだめ、悲しき運命、懊悩の世に返えずとは。残酷さだめ、悲しき運命、懊悩の世に、返えずとは<sup>9)</sup>。

と、柴田環が愉しさと怒りを込めて唱ったであろうアリアに、青木が深く感動したためではなからうか。

百合姫うしない、わが幸失せぬ。悲しき運命や。こよなき悲痛。なやみにたおれん。百合姫。百合姫。答えよ。答えよ。聞けよ。語るは汝が夫。真情はかわりなきを。百合姫失しない。わが幸うせぬ。悲しき運命や。こよなき悲痛。こよなきいたみ。百合姫。百合姫。はかな。答えあらず。くるしや。胸さけぬ。百合姫うしない。わが幸失せぬ。悲しき運命や。こよなき悲痛。悲しき運命や。こよなきせめや。さだめや。怨めし<sup>9)</sup>。

と、吉川やまが悔恨と哀しみを込めて唱ったであろうアリアも、青木の心に深く刻み込まれたのではなからうか。青木が〈オルフォイス〉を観たと言う記録はない。しかし、青木はその影響を確かに受けているように思われる。

ところで、1899年5月上京した青木は、最初小山正太郎の不同舎に勉んだ。多くの画家達と同様に小山も、1900年パリ万博に出張している。当時やはり官命留学によりパリに滞在していた浅井忠の『巴里日記』の同年9月26日の条に、「午後、小山福地二氏とビング氏を訪ふ。工藝品数種見て帰る」<sup>10)</sup>とある。小山、福地復一、そして浅井はサミュエル・ビングの店「ギャルリー・ド・ラール・ヌーヴォー」を尋ねたのであろう。このようにアール・ヌーヴォーを具さに観て帰って来た小山正太郎は、「アールヌーヴォーに就いて」(『太陽』1902年6月)で下記のように述べている。「近頃は、雑誌書籍の表紙や、或は挿画などに、のろりとした輪郭の太い、一種奇妙な絵が、盛んに用ひられるよふであります、あれは無論仏蘭西で初ったアールヌーヴォーの流行を追ふのでありませう。その「目的は、只一時の諸譚でありますから、広告とか、絵はがきとか、或は際物の書物の表紙など盛んに用ひられた」のであり、小山の見たフランス画家の作品に、その影響は認められず、万博の中でもオーストリア館の装飾に見られるだけであると、また小山は言う。そして、外国美術の新式流行の技法を真の美術製作に用いることは見当違いであるとも言う。小山はアール・ヌーヴォーについて懐疑的である。しかし、装飾美術としての一面の特質を正確に捉えている。「元来歐洲の美術界では、科

学的研究が、非常に進んで、遠近法でも、陰影でも綿密に規定されているのであるのです。されば、その方法に従って、斬新な事を作らうというのは、中々困難の事であるは、申す迄もありますまい。そこで一派の人々は、正当の方法を全く擲げ棄てて、線も、遠近法も、陰影も、配合も、全く定規以外に立って、一種不思議の絵を画き出した」。またそれを「分析して見ると、四五の古代美術を総合したものであります。埃及、波斯、亜刺比亜、羅馬、印度等の古代等の模様や、画法は、さまざまに綴合されてある。次に日本の古画も、慥かに其の元来の一である。太いのろりとした線や、人か神か解らぬ様の人物や、遠景がなくて、唯重り合っているやうな画等は、羅馬、埃及等の古器の模様には往々の見る所であります。」モチーフに総合的な古代性があり、その中に日本古美術の影響もあるということ、そして、のろりとした線(曲線)の多用、二次元的な重り合う色面と色面による平面的構成であると言うことも、小山は把握している。当時の画家の中に、藤島のように西洋世紀末芸術に深い興味を抱いて居た、鋭敏な感性を持った者が居たというべきではなからうか。しかも1902年、つまり《天平の面影》が発表される以前に。小山は続けて「茲に懸けて置きますが、アールヌーヴォーの傑作で、筆者は此の方の老大家で、ムシャールといふ人です。これは煖爐の傍に竝て置く小屏風などに貼る絵でせう。」これは、小山がフランスより持ち帰ったものであろう。そして、ミュシャのパノ・デコラティブであると思われる。藤島や青木が、小山の持ち帰って来たアール・ヌーヴォーの資料を観ることが出来たのか、勿論不明である。しかし、パノ・デコラティブのオリジナルが、当時日本に将来されていたことは確かなことであろう。

さて、青木は1903年末から1904年にかけて「天平時代の画稿類」を制作している。《享楽》(1903年)は箏篋と阮咸の合奏図である。これは藤島の《天平の面影》と《諧音》の影響を、明らかに示している。それはまた、「天平時代」というテーマが白馬会第8回展以後に構想されたであろうことを物語っている。そして、《享楽》(1904年)は、壁に阮咸を立掛け、いわば白昼夢の中に身を置くS字型の女性と、琵琶を手にしている女性が描かれている。或いは、インド起源である五弦琵琶を、青木は描いたものかもしれない。しかも、《享楽》(fig. 2)に描かれている4人の女性のモチーフは、《春》(1904年)(fig. 3)に描かれている向って右の4人の人物のモチーフである。《享楽》と《春》の4人の違いは、箏篋と阮咸を持った女性の着ている服が入替っているだけのことである。青木は、このようにエスキースながら《享楽》を対幅にしている。藤島は青木の部屋を尋ねている。1回は久米桂一

郎と、もう1回は長原孝太郎と一諸に<sup>11)</sup>。もしかしたら、青木は《天平の面影》の当初の、パノー・デコラティブ風に対幅にすると言う構想を垣間見る機会があったのではなからうか。『青木繁画集』の年表には、「天平時代を現はさんとしたる諸種の画稿あり、《春》と題する水彩画、油絵画にて描ける《享楽》二幀の如きは、天平の面影を偲びたるものなり」<sup>12)</sup>とある。《春》と《享楽》を、明らかに《天平の面影》の影響と見ている。

さらに、「天平時代の画稿類」は女性を横一列に配置し、背景は壁面である。その壁面の柱や連子窓の水平線や垂直線は、濃い赤や青や黒で強調され、直線的な構図であり、連子窓の向うには遠景がなく、平面的な構成である。このように考えると、《海の幸》に描かれている海の彼方の金泥の空間を、藤島の《天平の面影》の影響であると見て間違いないであろう。坂本繁二郎によれば、当初《海の幸》を「山の幸」と対幅にする構想があったと言う<sup>13)</sup>。

《オルフォイス》の製作スタッフであった、「北蓮蔵君の吹笛」も単純な風俗画でなく、つまり笛の音の感覚を描き現はすことを試みたものではないか<sup>14)</sup>と、黒田清輝は白馬会評(1903年)で述べている。その《月夜吹笛》(fig. 4)には星月夜、右下に岩に腰掛け笛を吹く男性が描かれ、傍らには麦わら帽子が置かれている。笛の音は牙渡り、その音に聞き入っているかのように描かれている二人の女性は、夕涼みなのかうちわを手をしている。この作品は夏に制作されたものであり、それは《オルフォイス》上演後であったのではなからうか。そして、黒田の言うように音楽というものが視覚的に表現されているのであろう。

また、湯浅一郎のこの年の白馬会に出品した作品の中には《画室》(fig.5)と言うのがある。アトリエの中央に、コスモスを活けた黒い花瓶と女性が描かれている。この《画室》は、明らかに《オルフォイス》の上演後に描かれたものであろう。白馬会に発表した当時の中央の女性は裸体であったという<sup>15)</sup>。背景のガラス戸は閉められ、戸外へ開放されていない。そして、その場を、空間を閉鎖している。また、背景の空間の中にその人体は溶込みつつあるようにさえ見え、光線は人体を包み込まず、足元に落ちている。この室内画も、従来の白馬会の室内画と趣きを異にしたものである<sup>15a)</sup>。翌1904年の白馬会第9回展に出品された温泉場の娘をモデルにしたと言う《徒然》(fig.6)には、描かれている娘の情緒的、感傷的内面が表現されているのではなからうか。

1902年1月、ヨーロッパより帰国した岡田三郎助は、すぐに東京美術学校図案科の洋画教授になった。

ところで、浅井忠と一緒にビングの店を尋ねている福地・小山等は、帰国後1901年10月に日本図案会を結成し



fig.1 青木繁《黄泉比良坂》  
東京藝術大学蔵

fig.2 青木繁《享楽》大原美術館蔵

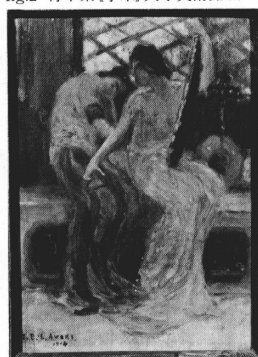


fig.3 青木繁《春》石橋美術館蔵



fig.4 北蓮蔵《月夜呼笛》



fig.5 湯浅一郎《画室》群馬県立近代美術館蔵



fig.6 湯浅一郎《徒然》群馬県立近代美術館蔵

た。1902年5月に第1回展が開催され、そこには福地によって将来されたアール・ヌーヴォーの版画が展示されている<sup>16)</sup>。また当時、大阪心齋橋の高島屋呉服店では、現今大流行のアールヌボース式の中巾縮緬友禅を売り出し、5月の藤の模様は花よりつるを見事に写した華麗な曲線を染出している<sup>17)</sup>。

岡田の「御帰朝当時学生等は此の新知識の先生を迎へて洋画はもとより工芸図案の御指導にまで大いに期待をかけたが」<sup>18)</sup>、また、「図案教育に就て独自の見界を持って居られた事折折教室で時の同科主任との間に争論があった事実で……その事を漏れ聞いた私達の目をそばたさせた事実でおよそ想見出来る」<sup>19)</sup>とある。しかし当時の東京美術学校図案科は、「日本趣味の旺盛な時代で」<sup>20)</sup>あり、また、「何もかも日本古典を無上のものとし徳川期を継承する明治工芸図案」<sup>21)</sup>界であつたらしい。岡田はあくまで洋画の教授であり、当時のヨーロッパの最新流行の装飾美術、工芸について講義することはなかったようである。

岡田は足利桃山徳川等の古裂の蒐集(本格的に裂地を手に入れたのは1904~05年頃<sup>22)</sup>)をし、「染織の手法や文様に就いての御説明を拝聴し得たので文様史の研究上に益したことも少なくなかった」<sup>23)</sup>とあるように、それを蒐集するだけでなく、その専門的な知識をものちに岡田は持つようになる。そして岩田藤七は、岡田について下記のように述べている。「明治大正の世態思想文物欧化時代にあつてでも《高橋夫人》《昔を偲びて》を発表されて確信をもって日本の精神の表れた油絵題材も顔料もフレームに至るまで日本のものを完成されやうとして寸毫の迷ひなく旺盛な精神力をもって自分の芸術を建設されていた。」<sup>24)</sup>しかし、岡田の日本の顔料、岩絵具や金銀泥の使用は大正期に入ってからである<sup>25)</sup>。《婦人像(高橋夫人)》等の背景には金箔の置かれた琳派調の屏風が描かれているが、その金箔は褐色の油彩で表現されている<sup>25b)</sup>。岡田のライト・モチーフは着衣、半裸、裸の女性像で

ある。岡田の蒐集した染織品は死蔵されることなく描いた物の中に表われているという<sup>26)</sup>。岡田は高雅な、風韻に富んだ日本婦人と、彼女らが袖を通しての豪華な絹の風合、質感、そして色感を油彩画の中に定着させようと試みたものであろう。言わば日本的な風俗を、伝統の蓄積のない西洋画の中に洋画の技法でもって如何に表現するかと言うことが、この頃の岡田の命題であったのではなからうか。

この岡田の特徴ある日本的なものへの関心、或いは回帰(と言えるのだろうか)は、帰国後の(着物で言えば元禄文様大流行といった)当時の時代風潮によるものであつたらうか。

藤島には、岡田の滞欧作品の《裸婦》(fig. 7)の影響であろうと思われるものがある。それは《桃花裸婦》(fig. 8)であり、岡田の描いた後向きの裸婦の体形、髪型、足のポーズに非常によく似ている。岡田が帰国して間もない頃に岡田の滞欧作を見る機会があつたに違いない。この《桃花裸婦》の制作は、まさしく1902年春であらう。また、岡田の滞在していたベル・エポックのパリについて、或いはヨーロッパ世紀末芸術について、岡田より藤島が何も聞かなかつた筈はない。

岡田の、1903年の白馬会第8回展出品作品の中に、《花の香》(fig. 9)というのがある。半裸の若い女が二人、小さな花を手に向かい合っている。彼女達が手にしている小さな花の甘い香り、さらにその若い女のもつ膚の甘い香りを描こうとしたものであろう。つまり題名の通りテーマは、さわやかな花と華の香であり、吸覚という感覚的なものが視覚的に表現されているのであろう。二人の女性の背景に遠景はなく、ただ森のような感じを平面的に出している。この《花の香》も《オルフォイス》の上演後に描かれたものではなからうか。

《オルフォイス》の製作スタッフではないが、1903年6月フランスより帰国した和田英作は、「バリグラッセ氏の門に入り昨年7月迄、アール・デコラチーフ(装飾意匠)を研究」して、また、装飾に関する図案等を持ち帰つたという<sup>27)</sup>。和田の、この年の白馬会第8回展に出品した滞欧作品のうち《肖像(塚本靖肖像)》(fig. 10)に、明らかにアール・ヌーヴォーの影響が見られる。黒田清輝のその展覧会評には「此肖像画を見れば1900年頃の巴里を連想されて非常に懐かしと思われる」<sup>28)</sup>とある。左下に à madame Tskamoto Eisaku Wada Paris, le 25 mars 1901とサインがあり、和田が何頃からグラッセに就いて装飾意匠を習い始めたか不明であるが、《塚本靖肖像》の背景には、アール・ヌーヴォーの装飾模様であらう草花文様の施こされた青地の壁が描かれている。この作品について、三宅克巳は「唯だ惜むべきは少しも

奥行がないことだ」と、白馬会の展覧会評<sup>28)</sup>で述べている。和田は、帰国後三保で描いた風景画を同じく出品している。その中の《夕なぎ》(fig. 10a)について、また三宅は下記のように述べている。「先づ此画を見る者は斜陽な夕雲に反射して海の面に映じて居る壮快な感に打たれる。(中略)若し強て此画を非難せば堅くして平面なる富士山はあらずもがなだ。」三宅の美術観<sup>29)</sup>をここで云々するつもりはない。しかし反面、三宅の和田に対するこの批評はその絵の中に形象化されているアール・ヌーヴォーの影響を、暗に指摘したものと見えよう。

翌1904年の白馬会第8回展に、岡田は《元禄の面影》(fig. 11)を、和田は井原西鶴の『好色五人女——八百屋お七』より題材を得た《あるかなきかのとげ》(fig. 12)を出品している。(「和田氏は<sup>デコレーター</sup>装飾家である、挿画家である。であるから、詩的感情が氏の製作の長所ではないのは当然である。氏自身も亦色彩を装飾的に取扱ふことに興味を有すると云ふ。(中略)そして氏は屢く色彩の調和や対照に興味を覚えて、それを主眼として構図を試みることがある様である」と、岩村透が和田を評している<sup>30)</sup>。この白馬会第9回展の会場構成を担当したのが和田英作である。和田はモザイク室を設ける等、装飾美術についても力を入れたようである<sup>31)</sup>。)

岡田の《元禄の面影》には花見の宴、たおやかな貴品溢れる元禄美人が描かれているが、彼女の踏んでいる敷物にはやはりアール・ヌーヴォーの影響であろう唐草文様が施こされている。《元禄の面影》というのには、《天平の面影》の感化が少なからずあるのだろう。しかし、藤島や青木がインスピレーションを得た天平文化ではなく、岡田や和田は、なぜ江戸文化に関心を寄せたのであろうか。それは、当時の時代の風潮とともに、二人の師であったラファエル・コランの影響が、少なからずあるのではなからうか。

コランより久米桂一郎に贈呈された、*Le Japon Artistique* (鉛筆によるコランの署名があり、1897年4月22日と贈られた日付が入っている)を久米美術館が所蔵している。コラン先生が、どのような言葉を添えて久米に、サミュエル・ビングにより刊行されたこの『藝術の日本』を贈ったか不明である。コランは日本人を弟子に持つことにより、日本美術の優れたコレクターになったのであった。弟子達は下記のように回想している。「先生は又日本美術の熱心なる愛賞家として知られてる人であるが、これは全く道楽の方で、日本の絵が先生の製作に影響を及ぼした所は余りない。唯だ古い錦絵の色の使ひ方は、先生が最も日本の美術として賞美されたものであって、春信と清長とが最も好きであった。北斎は矢張非常な天才であると言って居られたが、殊に風景と花の画や装飾

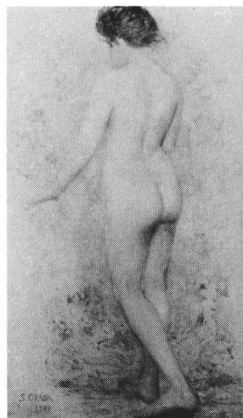


fig.7 岡田三郎助《裸婦》



fig.8 藤島武二《桃花裸婦》ひろしま美術館蔵

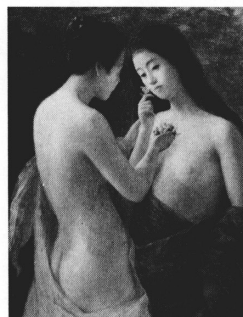


fig.9 岡田三郎助《花の香》



fig.10 和田英作《塚本靖肖像》千葉県立美術館蔵



fig.10a 和田英作《夕なぎ》



fig.11 岡田三郎助《元禄の面影》



fig.12 和田英作《あるかなきかのとげ》

の図案に長じているといふ説であった。斯様に古版画を色々集められた時代から、多少先生の色彩の使い方が違って来た様に見える。」<sup>32)</sup> (久米桂一郎), そして(和田英作)「先生には日本人の弟子や友人が多かったところからその所蔵品にも日本のものが沢山あった。林忠正などとは自分の作品を氏の所有の日本の古美術品と交換された」。続けて「抱一は真物に違いないが光琳の方はコピーのやうである。けれども、藝術家としての自分の趣味から云ふと、真物だとかコピーだとか云ふ風なことは問題じゃない。自分は真物の抱一よりも贋物の光琳の方を尊重する。この装飾的な所と云ひ、色の階調と云ひ、コンポジションの大きな所と云ひ、とても比較にならないじゃないか」。また「日本の美術では古代の仏像と奈良及び最初の平安時代の仏画を最も尊重すると云はれ、続いては古土佐と狩野の絵、浮世絵では北斎は活動を以て取り、春信は優美な線を以て取る」<sup>33)</sup>と。

かくのごとく、コラン先生の日本美術の知識は専門的に相当優れたものであったようである。コラン先生が日本美術の講義をされた時、岡田は述べている<sup>34)</sup>。コランは、印象派等西洋近代美術の受容したその影響についても岡田や和田に語ったのだろうか。彼らは、コランの下で油彩画の技法を習得しただけでなく、コランの日本趣味を通して、もしかしたら、その日本的な油彩画のテーマをも習得しえたのではなからうか<sup>34a)</sup>。

生涯、まったく変化することのなかった岡田の画風はコラン先生の下で培かれたものであり、岡田にとって、コランの影響は大変大きなものであった。日本人の若い弟子達にとってコラン先生は、或いは最良の師であったかもしれない。「(岡田)氏の画名の広く喧伝せられたのは、帰朝当時に齎した、裸体婦人の柔肌に於ける色調の美はしい感じを快く画いた諸作であった様である。《少婦》《読書》《泉》《初夏》の如きは、皆世人をして恍惚たらしめた」と、岡田の滞欧作品について坂井犀水が述べている<sup>35)</sup>。それはコラン風のヌードである。その岡田のヌードの影響を受け、《桃花裸婦》は描かれている。この当時、藤島は、コランの画風にも関心を寄せていたに違いない。

さて、『美術新報』(1903年8月12日)によると、〈オルフォイス〉の書割(ドロップ)は下記のようである。「吾人はその第一幕(現世場)の沈静な森を見てブリュックネルの画けるタンホイゼル(第1幕第3齣、第3幕)及びジョエウスキイ筆なるバルシファル(第1幕)の書割を見るの心地せり。第3幕(極楽場)は有名なピュギスがソルボルヌの壁画に依れるものなりと聞けり。紅の花咲き乱る間に、黄金の光あえかに輝ける様は実は極楽苑をよく表はせり。第2幕(幽界場)は暗かりし故明には見へざり



fig.14 PC.ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ(ラ・ソルボルヌ、或いは聖なる木立)

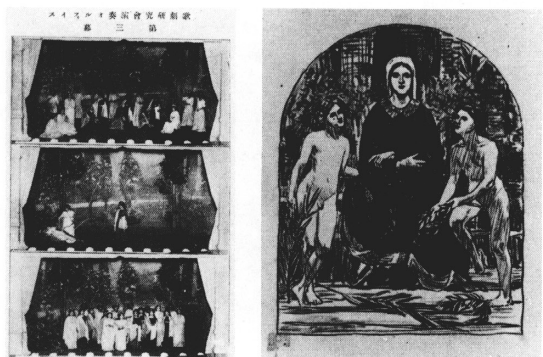


fig.13 〈オルフォイス〉の舞台写真「音楽の友」 fig.15 藤島武二(縮図帖)より

しが岩のかたちものすごき間にリゴボルドの燃えしは真に地獄の感を興さしめぬ。」(傍点引用者)。また「歌劇オルフォイスを観る」(『帝国文学』1903年9月)にもその記載がある。

この書割は廃棄されたらしく、また舞台装置のデザイン画も残っていないが、第1幕と第3幕の場面は『音楽の友』(fig. 13), 『美術新報』, 『太陽』にその写真が掲載されている。ピエール・C.ピュヴィス・ド・シャヴァンヌのパリ大学ソルボンヌの講堂の壁画(fig. 14)に依ってデザインされた、黄金の光あえかに輝けるといふ第3幕——背景の樹の下に立琴を持って佇むオルフォイス——が、藤島武二《天平の面影》の雰囲気に酷似している。「詩人オルフォイス」(『帝国文学』1903年12月)には音楽家の象徴としてのオルフェウスの持つ立琴のことを箜篌と記してある。やはり当時、宮内省正倉院御物整理掛による箜篌の復原は相当話題になっていたのであろう<sup>36)</sup>。

そして、石倉小三郎は、驚くべきことを回想している。「山本芳翠先生御不在の日、全体の構図をペリー先生が見て何か不満そうな顔をされる。天国の風景がお気に召さないらしいのです。そこで岡田、藤島先生が相談の結果それではソルボンヌのシャヴァンヌの壁画のようなのは如何でしょうと云われたら、ペリーさんは『それは大変よいです』と日本語で叫ばれました。それでは早速塗りつぶせという事になって改案」<sup>37)</sup> 山本は大変立腹したという。石倉、他3名が山本の家に行き円満解決したと、石倉は記している。山本と藤島の間には、冷たい顔のようなものが残ったであろうと思われるが、藤島は、全く気に掛けなかったのであろうか。石倉が第一次世界大戦の直前、ドイツ留学で渡欧した際ソルボンヌを訪れ、講堂の壁画を見て、「それはその時の〈オルフォ

イス)の背景と同じで」あったと続けて語っている<sup>37)</sup>。むしろ、岡田は、かつてソルボンヌでその壁画を見たことがあったろう。

「シャヴァンヌを目指して居たと聞いて居た藤島さんは、シャヴァンヌに死なれて誰に就いて勉強して居るだろうなどと話し合った」と、児島喜久雄が、藤島のフランス留学について述べている<sup>38)</sup>。藤島には、二冊の《縮図帖》があり、その中の1冊は、全てピュヴィス・ド・シャヴァンヌの模写である。それは画集、雑誌の図版、もしくは絵はがき、複製写真(今のところ、藤島が何を参考にしたか不明である)を鉛筆で薄葉にトレースし、その線を墨でなぞったものである。藤島は、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの画業のモニュメンタルな代表作品のほとんど全てを模写している。その中には、ソルボンヌの講堂の壁画の模写もある。部分図(fig. 15)ではあるが。

1903年頃石井柏亭が山本鼎と藤島の家を訪ねた時の事を、下記のように述べている。「若い時の西洋画の模したものを示したりした。それはピュヴィス・ド・シャヴァンヌの壁画を毛筆で薄葉に模したものであったが、藤島の装飾的なものに対する趣味が疾くから胚胎していたことはそれによっても分るのであった。」<sup>39)</sup>また、内田巖も下記のように回想している。「先生が装飾画に興味を持たれ『シャヴァンヌを偉大なり』と常に若い頃尊敬されていた事は已に多くの人々の知る所である。」<sup>40)</sup>また、「先生が廿代の時非常に困難と努力を傾けつつフランス名画の写真や本から、鉛筆で丹念に模写された二冊の写生帖を考へるのである。『その頃餘り画集なぞ手に入る事は殆ど不可能だったので、持ってゐる少数の人々から借り受けてはかうして描いたものだ』と先生は云はれた。先生はこの写生帖を常に座右に置かれ、時々出しては我々に見せられ最後迄病床を訪ねる人々にも示された。『若い日の努力に対する追憶』は、晩年非常に愛着と満足を常に快く先生の心に齎していたのである。(中略)その中にシャヴァンヌの模写もあったやうである。」<sup>40)</sup>鉛筆でと、内田は述べているが、その「二冊の写生帖」は《縮図帖》、或いは《画稿集》のことであろう。病床を訪れる人にまで示したというが、藤島にとってそれは生涯大切なものの一つであったのだらう。と同時に藤島は、《天平の面影》等の制作された1900年代について何も回想を残していない。それは化石のように風化しても、年月で終いに洗流すことの出来なかった心の痛みと言ったもののあることだったのか、それを識る術はないのであろうか。

藤島が薄葉にトレースしたものの中にはピュヴィス・ド・シャヴァンヌだけではなく、ジョットー、マニエリスムの絵画、レンブラントの版画等多彩なものが含まれ

ている。それは藤島自身が言っているように、手に入るものを全て片端から模写をしたのであろうが、その研鑽は相当なものである。

そして、『太陽』(1902年10月)の長田秋濤の「19世紀に於ける仏国絵画界の大勢」に、「サンボリズム——ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ」の項があり、美術というものも実際のみで決して成功するものではないとして、下記のように記している。「ドラクロアを首としてローマンチズム派が出来種々な変化を来して、実際よりは寧ろ理想的なものを描くことといふことが起つたのである。19世紀の終將に20世紀に入らんとする時分に、種々なる美術家が出て来て最も斬新なる一派を作つた。(中略)之が即ちサンボリズム派の始であつて、此表象的の新らしき形体の下に大人物や其性行を現はさうといふことを力めたのである。(傍点引用者)。この派の首領としてのピュヴィス・ド・シャヴァンヌの描いたものは、「古代の夢とか耶蘇教の勢力とか、詩人又は仏蘭西の上に最も価値高き森とかいふやうのものであつて、夫のダビッドのアカデミーの絵画を最も愉快な方に導いたものである。此ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの成し得た成功は此サンボリズムの価値を弥高くした。今から百年前を回顧すると前既に記した軍旗の授与の後に此神聖なる森の図か人間の心を樂ませるやうになつたといふ以上は所謂19世紀というものは想像画を以て始まつた如く、イデアリスムの大作を以て終りを告げた。」装飾美術としてのアール・ヌーヴォー(装飾画——建築装飾としての西洋世紀末美術の受容については、最後に少し触れるつもりではある)とともに、ヨーロッパ世紀末芸術としてのサンボリズムが日本に将来されていたであろうことを確実に示している。

青木繁は象徴主義について、下記のように述べている。「上田敏君は当時中々熱心に研究して居た様子で会う度に此話を持ち切つて居た。此象徴主義というのは或抽象的な現世の深意を具体的な物質で以て表象するので慎重な信仰と卓絶した技腕とが伴わなければ動するとも諷刺馱洒落既ち理的判解に陥り易いのである、画の方で此派の近世に名高いのはサー・エドワード・バーンジョンス卿(英)サー・テオドル・ワッツ卿(同)ガブルエル・マックス(独)其仏国数名ある。」<sup>41)</sup>(傍点引用者)。また、「文学的依憑こそ或は基督教或いは仏教の影響あれ、其本来的藝術的信仰はここにあつたのだ。譬えば復興期以前のサンドロ・ボッチェリ杯は其最たるもので復興期ではミケランジェロである、レオナルドダビンチである、皆人生という標象に裸体を使ってあつて実に自然の久遠悠久、人生の宏大雄渾の頌稱發揮したものだ。(中略)下つてはクリスチー・ピュビスドシャヴァンヌ、ワッツ、バーンジョンス、ファンタンラツール、ベックリン、セガンチニー

如きである。文芸の方ではホーマー、ダンテ、チョーサーを除いてジュヤスペア、ゴエテを下って今のトルストイ、イブセン、メーテルリンク、ツルゲニエフ其他である」<sup>42)</sup>と。

青木に比べ、藤島は言葉少なである。先に引用したが、藤島は、後年下記のように述べている。「(装飾画について)色や線だけではつまらぬ。それ以外に理想——意味を有たせたい、其題目の選み方は勿論其取扱に於てもそうありたい。西洋には神話があって、普ねく芸術の上に用ゐられて居るけれども、日本では神代以来伝説などがあっても、芸術の上には広く用ゐられて居ない、それを今後洋画に試みるには苦心と工夫を要する。」<sup>43)</sup>そして之を用いる場所に応じた意味を持たさなければならぬと語っている。

青木繁が述べている象徴という語は、フランス語の《Symbole》を訳した造語であり、中江兆民(『維代美学』1883年刊行)によるものであった。それは森鷗外のハルトマンの美学の翻訳で使用され、そして、上田敏の『明星』等に掲載されたフランス象徴派、高踏派の詩の翻訳を通して定着したものであると言われている<sup>44)</sup>。その上田敏の訳詩は、1905年10月に上梓された『海潮音』に集録されたが、その装幀を担当したのが藤島武二であった。青木は上田が、その研究をしており、その話をしたと言うが、上田は青木とのみにその話をした筈はない。青木には『海潮音』(1904年)という作品があるが、それは上田の影響を物語っているものであろうか。

そして、藤島の世紀末芸術としてのフランス・サンボリスムへの深い関心を、上田は、或いは察知していたのかもしれない。また、1903年白馬会第8回展に出品された藤島の《諧音》の、「画を以ってせずんば現はし難き思想を人格化して」と言う上田敏の批評には、上田の象徴主義の研究の足跡を示しているように思われる。加うるに、後年上田の寂滅後に刊行された『上田敏全集』の装幀は、藤島の手になるものであった。

久田二葉(園芸欄担当)は、「フランス國花 花菖蒲」(『家庭雑誌』1904年6月)の中で、下記のように述べている。「独逸の農家では屋上に此の花を植る。(中略)日本にも甲斐や陸奥などの農家の棟々に鳶尾を植る。(中略)東西其習慣を一にしたのはマア奇と云はねばなりませんまい。(中略)欧米では溪蓀は使者」と言う意味がある。これは花言葉である。花や草木、自然の物体に個有なイメージの宿されていると言うことは、緑濃い自然に培かわれ、その自然の移り変りに鋭敏な感覚を持ち、その自然の移り変りに則した生活様式を持つ日本人にとって、極めて興味深いものであったのだろう。また、比較民俗学的な見方がなされていることも興味深いことである。

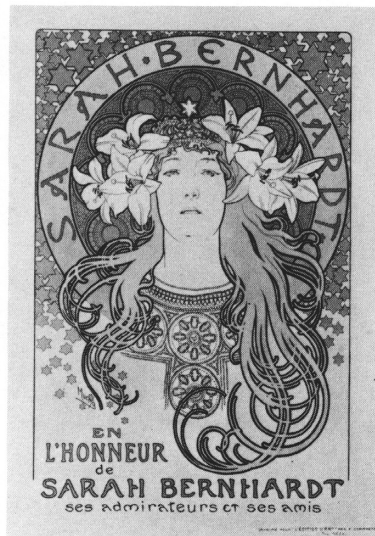


fig.16 アルフォン・ミュシャ(ポスター:サラ・ベルナルル)

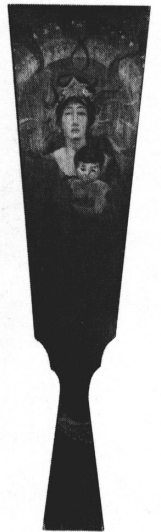


fig.17 青木繁(女星) 宗教法人パーフェクト・リパティ教団蔵

青木繁にはミュシャの《ポスター:サラ・ベルナルル》(fig.16)に、非常に良く似た作品があり、それは《女星》(1906年, fig.17)である。これは高島宇朗の長女、妻都子の旧丁初正月の祝に、青木の贈ったものである。「非常に鮮明な、燦爛たるのが、褪色して、上縁の孩児の戴く星の雲形全部の金泥も鏽びた。(中略)水仙(もしかしたら白百合の間違いかもかもしれない)は純潔の象、朱の放射曲線はエネルギー、虹は、うまれ出の祝福、虹の輪の中にあるは女性の徽號、孩児を包むは袍衣、母性の白肌膚に終綯を配せるは、小生の情熱を反襯せしなど説明した」と、高島宇朗が記している<sup>45)</sup>。「意味を持たせたい」という象徴的な意図、そしてそのアレゴリー——すなわち、サンボリスムなるものが、一般社会にも徐々に浸透していることを確実に示している。(『家庭雑誌』の対象は言うまでもなく、家庭婦人である。)

黒田清輝以来、フランスの大画家として、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌは、かなり早くから知られており、目標でもあった。また、ヨーロッパ世紀末芸術としてのサンボリスムの範中の中でピュヴィス・ド・シャヴァンヌの画業に深い興味を抱いた感性豊かな画家達が、この極東日本に於てもいたのであろう。また先に述べたように黒田は、北蓮蔵の《呼笛》の感覚的テーマを指摘している。黒田の言う理想画もやはり、何らかの象徴的なものを託そうというものであったのだろう。

ピュヴィス・ド・シャヴァンヌには、《白い岩, Le Rocher blanc》(c. 1869~1872)という作品がある。これは《マルセイユ, ギリシャの植民地, Marseille, Colonie Grecque》の主要部分のモチーフにより構成されており、1872年の売立て(失明した画家のため)に、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌは、《Le Rocher blanc》と言う題名

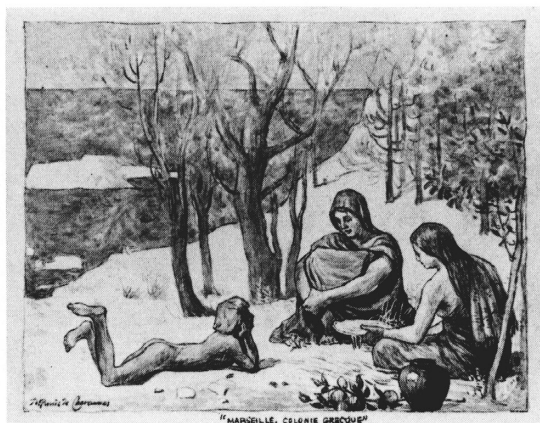


fig.18 《縮図帖》より



fig.19 《画稿集》より

で出品した。1899年、パリのデュラン=リュエルで開催された「ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ展」には、《Marseille, Colonie Grecque》というタイトルの下で出品されており、参考文献も、1899年以前のものはない<sup>46)</sup>。《縮図帖》には、この模写(fig.18)もあるが、題名は《Marseille, Colonie Grecque》となっており、少なくともこれは、1899年以降に模写されたものであろう。その図版は藤島の手にしたヨーロッパ世紀末芸術の資料の一つであったのかしれない。

後に、「アマン・ジャンの画に就て」(『美術新報』1912年4月)の中で、藤島は下記のように語っている。「要するに色調の穏雅と云ふことと構図の簡潔と云ふことが、自ら非常に気持の大きな、コセツカない、愉快な感じを与へて、知らず識らず夢幻の境地に観者を引入れるところは、丁度ピュヴキ・ド・シャヴァンヌの絵の与へる感じに、よく似て居る、勿論絵の趣は両者異っては居るが、極めて平和な静穏な感じを与へ、そして、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌには古典的趣きがあると言う。

《天平の面影》にある静謐な雰囲気、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの画風によく似ている。藤島は、ピュヴィ

ス・ド・シャヴァンヌを研究することにより、静穏な感じを醸し出す雰囲気と、かっちりした垂直線と水平線による、平坦な構図を習得したのであろう。《画稿集》の中には、《天平の面影》と同じような低い壁が配されている《眠れる街を夜通し優しき見守る聖ジュヌヴィエーヴ》の模写(fig.19)もある。

藤島は、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌに私淑し、《天平の面影》や《蝶》等に、日本的な特別な意味を託そうと、また、感覚的なものを描こうと試みたものであったのだろうか。

確かに《天平の面影》が制作されたのは、〈オルフォイス〉上演の1年位前ではある。(このことに関しては後に述べるつもりである)しかし、〈オルフォイス〉上演の、青木や岡田や北等に大きな影響を与えているということは明白なことであろう。『白百合』(1904年1月)には、和田英作提供によるギュスターブ・モロー《オルフェウス》の図版が掲載されている。そして、それは当時の音楽界にもやはり大きな影響を及ぼしている。

作曲家・小松耕輔は、「少くとも私は、あれで奮起した」<sup>47)</sup>と述べている。(未完)

## 註

- 1) 緑樹生稿「歌劇オルフォイスの演奏」『美術新報』(1903年8月20日)
- 2) 東京音楽学校管弦楽団の伴奏により上演されたのなら、指導もユンケルがしたと思われる。なぜなら声楽の指導をしていたのは、ユンケルであったからである。また当時、ケーベル先生は東京帝国大学での講義の傍ら、東京音楽学校でピアノを教えていた。
- 3) 近藤逸五郎、乙骨三郎、吉田豊吉、石倉小三郎『歌劇オルフォイス』東文館、1903年、pp. 3-4。
- 4) 三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』日東書院、1931年、p. 39
- 5) 三浦環『お蝶夫人』石文社、1947年、p. 245、この〈オルフォイス〉こそ、三浦環のオペラの初舞台であった。
- 6) 長尾一平編『山本芳翠』長尾一平、東京、1940年、p. 85
- 7) 青木繁『画論』『白百合』1905年2月、(『假象の創造』中央公論美術出版、1966年、p. 14)
- 8) 近藤逸五郎他、前掲書、pp. 78-79
- 9) 近藤逸五郎他、前掲書、pp. 83-84、石倉小三郎によると、この部分の翻訳は石倉の担当であったようである。石倉「グルックの歌劇オルフォイス日本初演の想出」『シイフオー』1949年5月、p. 13)
- 10) 芳賀徹『絵画の領分』朝日新聞社、1984年、p. 326
- 11) 浦原隼雄(有明)『蠱惑的画家 その伝説と印象』青木繁 遺作展覧会図録』青樹社、1933年、p. 22
- 12) 『青木繁画集』政教社、1913年、p. 181
- 13) 坂本繁二郎『私の絵私のこころ』日本経済新聞社、1969年、p. 39；正宗得三郎によると海、野、川の三部作にする中の一つであったという。「青木繁とその藝術」『造形藝術』1929年4月(『青木繁=明治浪漫主義とイギリス』展目録』東京新聞、1983年、no. 7、pp. 128-129)



- 14) 「白馬会展覧評」(『精華』1903年10月の転写、『明星』1903年10月)、『明星』の展覧会評では《吹笛》となっているが、『美術新報』(1903年9月20日)によれば《月夜呼笛》となっている。
- 15) 真室佳武「湯浅一郎とその時代」『湯浅一郎を中心とした近代日本洋画展』目録』群馬県立近代美術館, 1977年
- 15 a) コスモスの花は、ヴィンチェンツォ・ラダーザによってイタリアから持込まれた種子により、日本各地に広まったとされている。コスモスの和名に秋桜というのがあるが、これは明治30年頃の命名であり、この植物の在来型が、秋(夜の長さが一定)にならないと開花しない短日植物である性質を捉えている。コスモスの花芽をつくるのに必要最低の夜の長さは、約11時間であり、それはほぼ9月初旬の夜の長さに一致する。今日の夏に開花するコスモスは、50年程前に発見された突然変異体であり、夜の長さとは無関係に、種子を播いてから2~3カ月で開花する性質を有し、早吹種と呼ばれている。この《画室》に描かれているコスモスの花は在来型のものであり、白馬会出品当時の《画室》にこの花が描かれてあったとしたら《画室》は、9月に入ってから——白馬会間際に制作されたことを示している。いずれにしろ、当時のコスモスは珍らしい花であり、西洋を象徴する花であったに違いない。
- 16) この日本図案会第1回展覧会に展示されたアール・ヌーヴォーの版画の中には、現在、東京芸術大学に所蔵されているものは含まれていなかったようである。フォールベルトン(Paul Berthon?) 昔の夢図(Vision Antique, 1899, Panneau Decorative?), グラッセの皮下注射図(La Morphomane, 1897?), ステレーンの描図他13点が展示された(日野永一「アール・ヌーヴォーと日本の図案界」『アール・ヌーヴォーと日本』1982年, p. 49)
- 17) 明治33年の浴表新柄の紹介記事の中に、特派員が大阪心斎橋、高島屋呉服店で模写して来たというものが2点掲載されている。藤の花と、もう1点は菜の花の模様である。(澤むらさき「流行の中形」『新小説』1902年6月, p. 257, p. 258 図版)
- 18) 小場恒吉「追想の二三」(大隅為三, 辻永編)『画人岡田三郎助』春鳥会, 1942年, pp. 31-32
- 19) 広川松五郎「岡田さんと工藝美術」『画人岡田三郎助』p. 267
- 20) 小場, 前掲書, p. 32
- 21) 広川, 前掲書, pp. 267-268
- 22) 森口多里「明治大正の洋画」東京堂, 1941年, p. 211
- 23) 小場, 前掲書, pp. 33-34
- 24) 岩田藤七「名人気質の岡田先生」『画人岡田三郎助』, pp. 272
- 25) 岩絵松によって描かれた最古の作品の一つは《草原》(1911年)であり<sup>a</sup>、また、金泥の使用は《紅衣の少女》(1926年)からであり、銀泥の使用も《銀の諧調》(1926年)からである<sup>b</sup>、とされている。a) 森口, 前掲書, p. 216; b) p. 212
- 26) 田辺至「岡田先生を偲ぶ」『画人岡田三郎助』p. 41
- 27) 『美術新報』1903年8月5日
- 28) 「白馬会展覧会評」(前掲書)
- 29) すでに、1902年10月20日付三宅克己宛書簡で島崎藤村は、「大兄の自然派に聞くべき地面と和田君の開拓地とは大差あることと存じ候」と指摘している。『藤村全集(17)』筑摩書房, 1968年, p. 67)なお、和田英作は明治学院で三宅の一級上、藤村の一級下であった。
- 30) 坂井犀水「現今の大家(11)和田英作氏」『美術新報』1910年12月31日『美術新報』1903年8月20日
- 32) 久米桂一郎「コラン先生の製作と其平生」『美術新報』1916年12月
- 33) 和田英作「コラン先生の追憶」『中央美術』1916年12月, pp. 38-39 (和田は1899年6月ベルリンへ向けて渡欧したが、これはベルリンの博物館日本美術コレクションの目録作製の手助けのためであり、翌年3月留学の命が下り、パリに赴いたものである。ヨーロッパ近代美術が受容した日本美術について、和田は最も切実に感じ取っていたに違いない)

- 34) 岡田三郎助「ホンテェネー村のコラン先生」『中央美術』1916年12月
- 34 a) 黒田清輝は帰国後、京都で《舞妓》を制作している。岡田も1903年の春休みに、京都で舞妓をモデルに制作した作品を、《花の香》と一緒に白馬会第8回展に出品している。その中の《京の春雨》は、黒田の《舞妓》と同様階上の窓際に舞妓が配置されているが、黒田の描いたエキゾチックな《舞妓》と違い、はんなりとした舞妓の横顔が春雨にけぶる京の町を背景に描かれている。黒田と岡田の描いた舞妓の像に二人の感性の相違を見るのはやさしい。勿論それもある。と同時に、二人が過したフランス社会、文化の変遷、そして、その影響も少なからず受けたであろうコランの日本美術に対する知識の変貌等が考えられるのではなからうか。久米と和田の、コランの回想のわずかのばかりの相違点にも明らかなことではなからうか。そして、黒田も日本的な油彩画のテーマを模索していたに違いない。
- 35) 坂井犀水「現今の大家(14) 岡田三郎助」『美術新報』1911年4月, p. 3; fig. 7は《初夏》(fig. a)のエスキースである。また、後年描かれた《水浴の前》(fig. b)はこの《初夏》のモチーフにより構成されていることは明白なことであろう。



fig. a 岡田三郎助《初夏》

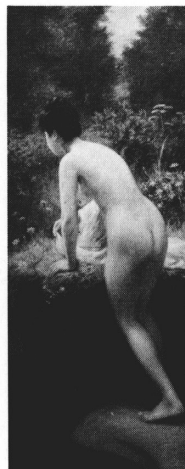


fig. b 岡田三郎助《水浴の前》  
石橋美術館蔵

- 36) 「彼れ其懊悩の情と思慕の念に之堪へず、孤筑その筈篋を提げて遠く黄泉へとたどりたどり行きぬ」
- 37) 石倉『シンフォニー』p. 13
- 38) 児島喜久雄「藤島さん」『美術』1939年1月
- 39) 石井柏亭「画壇是非」青山書院, 1949年, p. 12
- 40) 内田巖「画家と作品」高桐書院, 1948年, p. 64
- 41) 青木, 前掲書, p. 63
- 42) 青木, 前掲書, p. 43
- 43) 坂井犀水「現今の大家(15)藤島武二氏」『美術新報』1911年7月, p. 274
- 44) 野田宇太郎「明治の翻譯創造語」『明治村通信』no. 35, 1973年4月; 細井雄介「象徴」(今道友信編『講座美学(2) 美学の主題』東京大学出版会, 1984年, pp.197~198)
- 45) 『「青木繁 = 明治浪漫主義とイギリス」展目録』, no. 16, p. 131
- 46) *Puvis de Chavannes, 1824-1898, exh. cat., Paris: musées nationaux, 1976, no. 76, p. 99*
- 47) 小松耕輔・宮沢縦一・牛山充『日本のオペラの歩み』日本のオペラの歩み刊行会, 1959年, p. 6

## 美術館案内

### ブリヂストン美術館

**場所** 東京都中央区京橋 1-10-1(〒104)  
TEL. (03)563-0241

**開館時間** 午前10時～午後5時30分

**休館** 毎月曜日 年末年始(12月26日～1月4日)

**入場料** 個人：  
一般¥400 大・高生¥300 中・小生¥150  
団体(15名以上)：  
一般¥300 大・高生¥200 中・小生¥100  
なお、特別展の場合は変更することがある。

### 石橋美術館

**場所** 福岡県久留米市野中町1015  
石橋文化センター内(〒830)  
TEL. (0942)39-1131

**開館時間** 午前10時～午後5時

**休館** 毎月曜日 年末年始(12月26日～1月4日)

**入場料** 個人：  
一般¥300 大・高生¥200 中・小生¥150  
団体(20名以上)：  
一般¥250 大・高生¥150 中・小生¥80  
なお、特別展の場合は変更することがある。

## Guide to the Museums

### Bridgestone Museum of Art

**Address** 10-1, Kyobashi 1-chome, Chuo-ku,  
Tokyo 104, Japan  
Phone : (03)563-0241

**Museum Hours** Open daily from 10.00 a.m.  
to 5.30 p.m. except Monday  
Closed from December 26 to  
January 4

**Admission** Adults ¥400  
Students ¥300  
Children under 15 ¥150

### Ishibashi Museum of Art

**Address** 1015, Nonaka-cho, Kurume,  
Fukuoka-ken 830, Japan  
Phone : (0942)39-1131

**Museum Hours** Open daily from 10.00 a.m.  
to 5.00 p.m. except Monday  
Closed from December 26 to  
January 4

**Admission** Adults ¥300  
Students ¥200  
Children under 15 ¥150

石橋財団  
ブリヂストン美術館  
久留米・石橋美術館  
1983年度館報/第32号

Ishibashi Foundation  
Bridgestone Museum of Art  
Ishibashi Museum of Art  
Annual Report No. 32(1983)



